

有無庵追憶

田

中

書

有無庵追憶
田中書中書

題字　日本南画院理事　木原信氏揮毫



有無庵主
田中諭吉氏を偲ぶ

田中 諭吉



明治三十四年一月二十九日、福岡市博多区
川端に生る。

福岡日日新聞社、西日本新聞社、西広、大広
などに勤務。

福岡のアイデアマンとして、各種企画を手
がける。

「有無庵」(ユーモア)と自称す。

昭和四十五年九月五日没。

著書「企画奥の手」他。

目

次

表紙	字	木	原	藤	一	馬	信
アイデアマン田中さん		福岡市長	博多総鎮守榆田神社宮司	阿部	邦彦		
おたふく面と論吉翁		RKB毎日放送ディレクター	(有)池見商会代表取締役	木見	輝子		
向日葵の季節に			光雲神社宮司	大津	清隆		
荒津まつりと田中論吉氏				西津	5	4	3
光雲神社の復元				田久	新四郎		
はにわの拝殿				西美	7	7	
曲水の宴				大	久		
思い出の田中さん		戒壇院住職		森	大		
田中さんの想い出あれこれ				島	西		
田中論吉さんの想い出		福岡朝日広告社顧問		岡	本		
田中論吉さんの想い出あれこれ		南区防犯組合長	町連会計幹事	大	西		
無毛文化財の想い出		(株)大広九州支社営業部部長	博多町人文文化連盟事務局長	森	津		
ゆーしゃんの想い出			友杉淳治事務局長	岡	田		
田中論吉さんと言えば勘亭流				大	久		
田中論吉先輩の想い出		(有)博多精版印刷所		西	美		
ユーニシャン		福岡国際ホール社長		見	新		
田中論吉さんの想い出		日本南画院理事		輝	四郎		
田中論吉さんの想い出		博多民謡協会会長		邦	7		
田中論吉さんの想い出		詩人		彦	7		
田中論吉さんの想い出		凸版印刷西日本事業部顧問		一郎			
田中論吉さんの想い出		児童文学者		定一郎			
田中さんと放生会		前曾崎八幡宮宮司		菊			
父に代りて		元西日本新聞社審議委員長		一			
田中さんを偲んで		かつら師喜一郎		11			
恩人田中論吉先生を偲んで		桜井神社宮司		10			
あたたかい想い出の博多弁		筑前琵琶総師範		9			
思 い 出				8			
古き良き時代の大先輩				7			
私と論吉さん				6			
				5			
				4			
				3			
				2			
				1			

論吉さんの思い出	西日本新聞社顧問
懐かしいあの笑顔	作家
田中論吉先生の事	名菓千鳥屋社長
論吉先生を偲ぶ	太宰府天満宮禰宜
田中論吉様に感謝	金剛沙門
田中さんの思い出・ニコニコ戦闘機	フクニチ新聞社論説顧問
謝 辞	福岡県婦人新聞社社長
論吉さんとの縁で生まれた二大行事の裏話し	西鉄エージェンシー
田中さんのオイシヤン・田中氏と和樂路会	西海道和樂路会幹事
漢 詩	
筑前琵琶新曲	
奇徳の人論吉さんの思い出	株新天町商店街公社社長・博多仁〇加振興会会長
田中論吉さん	郷土史家
田中さんと仁〇加振興会	博多仁〇加振興会常任理事
田中さんの思い出	博多仁〇加振興会常任理事
追想詩画	九州漫画家協会会長
思 い 出	九州漫画家協会会員
論吉の種	九州漫画家協会名誉会長
安永さんとのプロレス試合	九州漫画家協会会員
まぼろしの黒田藩宝物殿	九州漫画家協会会員
田 中 さ ん	九州漫画家協会会員
父 と 私	九州漫画家協会会員
義父の忌の前に	長男嫁
我が家の宝物	長女
大成功じやつた	次男
みそつかすの弁	次女
私の名前	次男
博多にわか	妻
兄の思い出	妹
お礼のことば	男

102 99 98 97 95 94 92 92 91 82 81 80 79 77 76 70 68 67 65 62 61 55 52 51 49 48 44 43 42 41

「アイデアマン 田中さん」

福岡市長 進 藤 一 馬

或る時は、たくさんのシビンにビールを入れてホステスを全員看護婦の服装をさせて、光り輝く大パーティーをされたとも聞いております。

常に笑いとユーモアで人ととのコミュニケーションをつくりました社会を明るくするという得難い方でした。

一方では大変な勉強家で、よく読まれていた古書の中に「曲水の宴」という言葉を見つけ、即座に取り入れ太宰府天満宮のあの優雅な曲水の宴が今日まで続いておりますが、大変素晴らしいことであります。

とにかく神社仏閣には賑やかに人が集らねばというのが持論で箱崎八幡宮の放生会のとき、絵をかいた美しいボンボリを参道に並べたのも田中さんだそうです。

生粋の福岡人（本籍天神）で博多どんたくの仮装行列などにもいろいろ工夫をこらし、新しいアイディアを取り入れて指導されていましたようす。

卓越したアイディアマンで明朗活達、愛郷心の強い田中さんに相談すると何事もうまく運ぶというので皆んなから愛された方でした。

六十九才の若さで亡くなられましたが、もつと長生きされれましたが、大変なアイディアマンでまた、とても愉快な方で人を笑わすことにかけては右に出る者がない程でした。

すぐ浮かぶのが光頭会の結成で、西日本相互銀行（今の西日本銀行）の当時の頭取でありました東令三郎さん達と見事に頭の禿げた二十人ばかりのグループが集まって酒飲み会や禿げコングルなど催しておられたようです。

田中さんは、最初西日本新聞社の絵画部に勤めておられて、「さざえさん」の漫画で有名な長谷川町子さんと一緒に仕事をされていたと伺っております。

九州漫画家協会の会員として、漫画界の発展にも力を尽くされましたが、大変なアイディアマンでまた、とても愉快な方で人を笑わすことにかけては右に出る者がいない程でした。

すぐ浮かぶのが光頭会の結成で、西日本相互銀行（今の西日本銀行）の当時の頭取でありました東令三郎さん達と見事に頭の禿げた二十人ばかりのグループが集まって酒飲み会や禿げコングルなど催しておられたようです。



進藤一馬市長さん、頭山泉和楽路会々長さん
元講談社福岡支店長 平山氏夫人と箱根路で

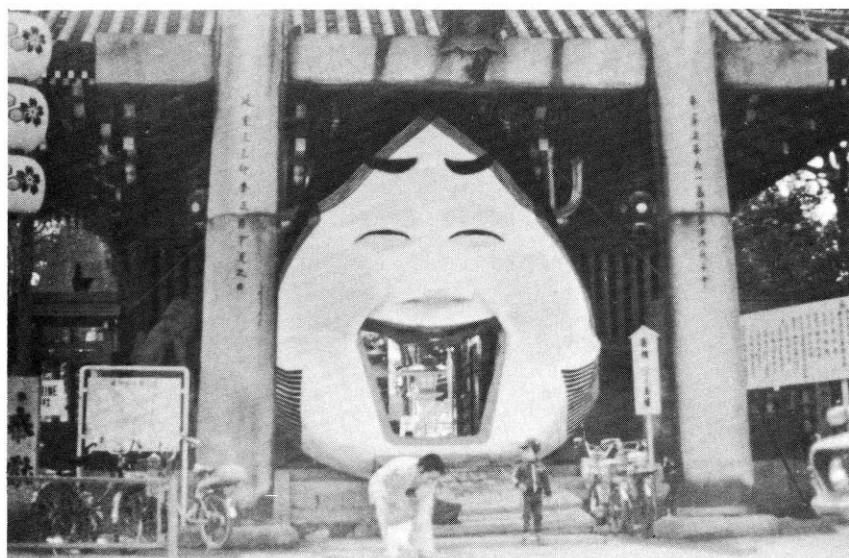
「おたふく面と諭吉翁」

改めて感謝申し上げる次第です。

博多総鎮守櫛田神社宮司 阿部邦彦

創意工夫。世に優れた万能プロデューサー。現代風に申し上げると超アイデアーマンとでもお呼び出来るのが田中諭吉氏であり、博多をこよなく愛し、特に当社の祭事に関しては、特段の御奉仕を頂いたと聞及んで居ります。すなはち、私の前任宮司竹間保史氏（故人）の懇請に応じて、昭和36年頃節分厄除大祭を隆盛ならしめようと奇抜な迄のアイデアを提供、御指導賜つたのが、現在迄も日本一と云われている「大福餅」4斗樽33丁、まさに益々繁盛（餅々半升）の二〇加調。お櫛田様の正面玄関（楼門）には喜色万面、笑を浮かべた其の口を競つてくぐる「福くぐり」。福が来んならこつちから行こうとお福様の口に飛込んで行く。この発想、まさに諭吉魂の発露で、今や押しも押されぬ日本一大おたふく面で御座居ます。今日猶も翁の御魂は年と共に弥栄ます。お櫛田様の御元にありと申し上度い。今や華々しく西日本随一の節分祭と報道される迄になつた。

ほんの一端を諭吉翁の在日を思い十七回忌御法要にあたつて改



節分大祭大おたふく面

「向日葵の季節に」

RKB毎日放送ディレクター 荒木輝子

街なかに向日葵(ひまわり)の花が目につく季節です。炎天の下に、あざやかな黄色の大輪の花弁をひろげているこの花を眺めていると、

私は何故かいつも田中諭吉さんことを思い出すのです。太陽に向かって、たからかにいのちのうたを謳つているような夏の花のすがたは、明るく闊達な人柄だった人のイメージにダブつて、今も限りなく親しくなつかしく偲ばれてなりません。

かつて私が新聞社に勤めていた頃、田中さんは丁度働きざかりの男ざかり。つややかな丸い頭に丸いメガネ、ダブルの背広などをパリッと着こなして、陽気な口調で挨拶を交わしたり、仕事の打ち合わせに飛びまわっていた姿が、今もあざやかに記憶の中からよみがえります。そのすがたはいつも活力にあふれていて、私は当時ひそかに『ライト・ダディ』(明るいお父さん)というニックネームを呈しておりました。時折『やア荒木さん。元氣ですか?』などと廊下で声をかけられると、ふしぎに元気が出るような気分になりました。まさに心身ともにライ

ト・ダディの田中さんだったのです。

先頃、NHKのアンコール放送で新日本紀行「博多」が放映されたことがありました。太宰府天満宮の神前に並んだ人々のなかに、十数年ぶりになつかしいライト・ダディのお顔を拝見しました。「光頭会」(こうとうかい)と名づけられた「ユーモラスで洒脱な博多の大将たちの集いの中心メンバーとして活躍されていたことを、あらためて思い出しました。モノクロの画面のなかの田中さんに、私は「ライト・ダディ!」とよびかけてみました。つややかなおつむの方々の語らいのなかに、私は自分の青春の日を重ねて、テレビの画面に見いつたことです。

先日、田中さんがお亡くなりになつて今年でもう十六年になることを知りました。しかし、長い歳月を経ながらも私の記憶のなかのライト・ダディは、いつも向日葵のように明るい存在のまま生きつづけておいでです。そしていま、この花のいのちがお子さん方にもしかとうけつがれ、更に新しい開花が見られることも、私にとつてまことにすばらしい眺めだと思われてなりません。不可思議な生命の流れを、一本の向日葵の鮮烈な花芯のなかに見る想です。

夏の陽にま向ひて佇(た)つ花に似しかの君なりし よきひとなりし

「“荒津まつり”と田中諭吉氏」

池見商会代表取締役 池見清隆



鏡に写した自画像

田中諭吉さんの奥様より十七回忌にあたり何か思い出を書いて頂く様に御依頼を受けましたがたまたま今は亡き荒津文化観光振興会副会長倉八房門先輩の書き残された「アイデアマン田中諭吉氏を偲ぶ」という名文がありますのでこれはまことに田中先輩の事を全て立派に云尽されていますので私の文に替えこれをお掲載させていただきます。

「アイデア・マン田中諭吉氏を偲ぶ」

荒津文化観光振興会副会長 倉 八 房 門

光り輝く丸い頭、止めどなく湧き出るアイデア、人をひきつける話術とユーモア、休むことを知らぬ行動力、田中氏はまさに希有の人であった。

氏は明治33年生まれの生粋の博多っ子で、博多人特有の進取の気性と底抜けの陽気さを持ち合わせた人で、博多仁和加をやれば天下一品、周りの人達は抱腹絶倒したものである。

フクニチ新聞社を皮切りに、西日本新聞社、西広、大広など、

企画、宣伝の分野で長年活躍して来られたが、氏の卓抜なる頭脳から生み出された優れたプランは枚挙に暇がなく、福岡市発展の蔭の功労者の一人であると言つても過言ではあるまい。

例えば、戦後の焼跡に新天町を誕生させたアイデア、太宰府名物の『曲水の宴』福岡城跡の各流合同茶会、福岡光頭会、銀髪会の設立、光雲神社の再建など、すべて氏の発案によるものである。

田中氏は単にアイデアを思いつくだけでなく、それを実行に移すため、自分で趣意書を作り、関係者を説得して回り、スポンサーから寄付を募り、行事の細部まで演出するなど、八画六臂の活躍ぶりは凡人の及ぶところではない。

しかも、いかなる企画においても、自己の名利に結びつける考えは微塵もなく、常に舞台裏の演出家としての立場を貫き、自分の書いた筋書きどおりに人が動き、お膳立てどおりに事が運ぶのが嬉しくてたまらないという風であった。

まさに企画三昧を楽しむ境地に住しておられたのであるまい。

田中氏は西公園とは縁が深く、以前から藤香会などで、たびたびお目にかかつたように記憶している。

古い歴史をもつ、荒津地区を何とか発展させたいという、われわれの切実な願いを理解し、氏が智恵袋を開いてくれた結果

が『荒津まつり』を実現させる運びとなつた。

荒津港を舞台に展開された、大陸との交易、文官、武官、僧侶などの往来、このような古代ロマンの再現は、歴史に造詣の深い田中氏ならではの発想である。

古き時代への郷愁、それは、われわれ誰しもが心に深く根ざすものであるが、氏はこのような心理を巧みに利用して、荒津の名物行事を組立て、西公園地区の振興につなげようと考えられたわけで、アイデア・マンとしての面目躍如たるものがある。

氏が新しいプランを話す時は、その見事な光頭は活き活きと輝き、アルコールが入るにつれ、奇抜なアイデアが次々に飛び出し、関係者を夢中にさせることが、たびたびであった。

この『荒津まつり』の企画が、田中氏の最後の仕事、いわば遺作になつたとは、まことに心残りであり、因縁めいたものを感じる。

昭和四十五年二月、池見氏宅で打合せ中、突然吐血され、そのまま入院、ガンの手術を受け、九月には不帰の人となられた。

入院中も『荒津まつり』の準備状況が気がかりであつたようで、手術後、こつそり病院を抜け出し、『遣唐使の船出』のショウウに僧侶姿に扮して出演されたこともある。

まさに企画という戦場に命を賭けた戦士の姿であつた。

早いもので、十年の歳月がアツという間に経過し、田中氏の名前を知る人も少なくなってきたのは淋しい限りである。

しかし、"荒津まつり"や"曲水の宴"は福岡市の伝統行事として末永く後世に伝えられていくに違いない。これを発案、演出した天才的なアイデア・マンの名は知られなくても、人類の歴史とは、このようなものであろう。

「光雲神社の復元」

光雲神社宮司 石津新四郎

今年も八月三日、第十一回目の"荒津まつり"が盛大に行われたが、西公園一帯の年中行事として定着し、逐年盛んになってきたのは、まことに喜ばしい。

私どもは、まつりの企画者、偉大なアイデア・マン、田中氏のご功績を偲ぶとともに、力を合わせ、このまつりの発展を図つていかねばならない。それが故人の意志を継ぐことになると思う。

戦前の莊厳な桃山造りの社殿は、昭和二十年六月の大空襲によつて、その莊麗美もありますところなく灰燼となりました後に奉職し、私の使命である念願の光雲神社復元奉贊会が、昭和四十一年八月に福岡証券取引所理事長吉次鹿藏氏を会長として結成され、田中諭吉氏は会長の依頼をうけて本会の事務局長に就任いただき、神社復元の多難な大事業に一方ならぬ御尽力くださいましたことを、心から深く感謝いたしております。

氏は奉贊会の趣意書をはじめ竣工にいたるまで、あらゆる面におきまして、非凡なる才能と手腕を次から次へと發揮し、誇りと自身をもつて貢献していただきました。

地鎮祭、上棟祭、竣工御遷座祭を、滞りなく厳粛に斎行し終えた後の奉贊行事は、本丸跡より黒田二十五騎の武者行列、黒田藩砲術、稚児行列等、厳な中に賑やかに執り行うことができて、参加された方々また、沿道の人々にも心から祝い慶んでいただけました。



これも偏えに田中様のお陰による賜ものであり、思い出でもあります。

まだまだお力添えいただきたく望んでおりました折に残念なことになり、無念さで一杯でございました。

最後に十七回忌を迎えるにあたり、御靈のご冥福を心からお祈り申し上げます。



万葉のロマンを誘う荒津祭り



黒田二十五騎 武者行列

二男耕基、三男卓史を従えて
下におろう、下におろう。



「はにわの拝殿」

東郷神社 内田久美

此の神社がある限り田中翁のことは忘れられないことでござります。有難うございました。
因に此の山上生活の基となる水は古えから湧き続けて来た清水でございます。

お宮は何処ですか？ ときかれる程東郷神社の拝殿はお詣りの人に奇異の眼を瞠らせます。もともと此の大峰山は古えの人々の生活に適した処と想はれます。それはすぐ下は海。水は山の中腹にこんこんと湧き出る清水、山には雉、兎、狸、他の親しみやすい動物が、そして四季を通じて野鳥がさえずり鶯も八月まで鳴きます。又岩は石器にもなる玄武岩ばかりで祖先達が使つたのではないかとおもわれる作られた石器が今も気をつけて歩けば落ちております。

此のような処に目をつけられた田中諭吉先生が拝殿は、はにわ型に、とおすすめ下さったと亡父からきいております。そして度々山火事に逢いまして貴重な建物を焼失しましたので鉄筋コンクリート建築になつております。

毎日をただ追われながら生活しておりますので古い父の日記を繙く暇もなくとう／＼切間際に慌てて拙ない筆をとりました。



はにわ型の東郷神社

「曲水の宴」

戒壇院住職 大西眞應

その頃と思うが、次は曲水の宴である。第一回開宴以来ズツト参加しているが、一昨年だつたか、法要の都合で欠席した。もう廿数回にもなろおか。光頭を輝かして見事な司会ぶりが今でもしのばれてならない。因みに凜々しい武者姿の衛士は御次男耕基氏であつた。これは第一回のことである。

懇意に甘え、敢えて諭吉さんと喚ばしてもらおお。諭吉さんは、自他共にゆるした、稀代のアイデアマンであつた。よくもまとと、機関銃のよおに、飛び出してくるものだと、敬服している。

曰ク 光頭会へこれは尤も当を得ているゝ、和楽路会、銀髪会？等々枚挙にいとまない。

いつか和楽路会にさそわれて志賀の島行きに参加したことがある。最年長の末永節老大仁を始め老若男女それぞれ時代衣裳にての行進である。特に眼を惹いた方は、須崎辺の佐座茶屋の

御主人であつた。この御仁は普通の商いにもスゲ笠、手甲脚脛とゆう文字通り元禄時代のいでたちである。老僧はまだ少し若かつたが志賀の町並みを行列が通る。地元の人々のささやき。あの坊さんが一番よく出来とる云々。何を馬鹿な、本物は俺一人だと叫びたかった。

勿論この御膳立ては諭吉さんだつた。

いつか野間大池附近のお寺で、某氏の葬式が執行され、諭吉

さんが司会をされていた。それから幾年か経たぬうち、御本人が逝かれた。時間の経過は逝く川の水のよおなものだ晝夜をおかずと、孔子様の名言である。もお逝かれてから、十七年にもなるとか

今頃は冥土とやらで、エンマ様とカケ会イ万歳でもやつておられることであろうお

諭吉さんの発案である、太宰府天満宮曲水の宴は筑紫野に春一番を告げる行事として定着している。なお未亡人美沙緒女史は第一回以来欠がすことなく、朗詠を献納されている。いつ迄も御元氣で続けていただきたい。



「思い出の田中さん」

福岡朝日広告社顧問 大森菊一

私と諭吉大先輩との出会いは、大東亜戦争の真只中、昭和十七年四月です。九州日報に在職中の私は、福岡日日新聞と合併後、西日本新聞社広告部に勤務となつたが、どんな事をしたらいいのか皆目わからず唯々遊んでばかりいました。そんな折りに事業部の田中とゆう人から呼び出しを受け始めて新聞社主催の大東亜博覧会（西新の百道松原）の日本館の副長を命ぜられた。その時の館長が田中諭吉さんで背は余り高くないが丸々と肥った頭はツルで仲々のエネルギーッシュな好男子。駄ジヤレやトンチが良く利き、特に博多仁〇加の名文句は天下一品。

開催中に大暴風雨が起こり大きさわぎした事も想い出の一つ。

その後私は東京支社から事業部へ帰つて来てみると田中さんが庶務に居られ久闊を温めてました。縁は異なるものと言いますが私も新聞社を退め近畿広告（現在の広告の大広）に働いている時に田中さんが「宜敷しゅう頼んますバイ……」と入社。再びここで握手。帰りが一緒の途で野間で途中下車し酒屋で「カク

ウチ」。飲みながら仕事の企画の話がはずむ。節分には必ず櫛田神社の表、福笑い門も田中さんの発案。一緒に藝人を連れて炭鉱の慰問や「のど自慢」の審査等々楽しい思い出のみ多かりります。もう十七回忌とは早いものです。今のギクシャクした世の中に諭吉さんのトンチや駄ジャレで大笑いで吹きとばしたいのですが。



「田中さんへの

想い出あれこれ

株式会社大広九州支社
営業部四部部長 岡 部 定一郎

昭和三十二年私が新天町におりました折（丁度その頃、私は新天町の宣傳専任の職員として勤めておりました）田中さんを知りました。西広にいらっしゃって、天神地区の商業祭、天神まつりの催事として、旧西日本新聞社旧講堂で、今NHKで人気大河ドラマになつてている武蔵坊弁慶安宅の関の一幕を楽しく拝見したのを覚えております。くるくる坊主にタッパイの良い体かくに、トキンをつけての名セリフ、その長いセリフを、六尺棒に小さく書いて、棒をクリクリ廻しながら、名調子でのセリフ廻し、今までハツキリ思い出します。その後、昭和三十六年か三十七年頃だったと思いますが、縁あって大広へ嘱託として入社され、私と机を並べる事となりました。博学多才、智略即妙、名筆能文の田中さんに驚きと畏敬の念におそわれました。今日、私がこのようにして博多を愛し、郷土文化の一端を、色々な場を頂いて展開いたしておりますのも、この田中諭吉さんの出会いによるものだと、深く感謝申し上げております。



第5回曲水の宴 今東光氏参宴

亡くなられて十七年と聞き、その年月のたつ事の早さにびっくりいたしておりますが、今尚、福博のイベント、祭礼の中に田中さんの発想を時代と共に若干構成・演出に手を加えて現在、面々と生きつづけているものがたくさんあります。まず最初は、昭和三十八年田中さんによつて再現された「曲水の宴」です。すでに二十三年目を迎えるとしていますし、更に発展し、一〇七年祭を期して神事となり、春を呼ぶ全国的な祭りとなりました。この曲水には色々な思い出がたくさんあります。が、しかし、観梅・集客催事が多くの皆様方に支えられ一人歩きをはじめております。

それから福岡城祉にて昨年まで二十年間開催されました各流合同野点茶会、本年からは色々な事情があつて中止いたしました。残念な事です。しかし第一回目を創設する智略には全たく感服したのを覚えております。いずれ機会があつたら話す事にいたしましよう。

次に荒津まつり、春の祭典や夏の祭典、昭和四十九年のみ秋の祭典して行つた事もありました。やがて幾多の方々や地域校区の人々によつて「まつり大濠」となり祭りの要素の三つを一つにして現在なお生きています。

その他は、博多祇園山笠の振興策として一緒に仕事した、集団山見せの発案実施や、日立をスponサーにして行つた永代奉納番外飾り山笠、この二つもすっかり定着し、観光の目玉催事・

展示物として福博の中に話題を与えております。

それから田中さんが提唱した博多仁〇加振興会も、今年で三十年これも立派に生きております。

思い出せば、田中さんが亡くなられて十七年、私なりに田中さんが創くられた色々な文化催事を大切に一生懸命およばずながら継承して来ました。それぞれに立派に育つて行きました。これが田中さんにお供え出来るご恩に対しての万分の一の供養と思つております。

私も五十五才路を越え過去をふりかえり、来世を生きぬく若者へ何にかと教えなくてはならない歳となりました。田中さんから受けついだ「博多を愛し続けた心意気」を大切にキット申し伝えて生きたいと心に銘じながら筆を下します。

合掌



曲水の宴 昭和39～40年頃
田中さんが未だ曲水の宴解説をして進行しておられました。

故 田中諭吉氏 十七年忌に捧げて詠む

○ 流れゆく水面かわらじ曲水に

想いは遙るか侍りし人々

○ 春づげて、宴に遊び、傳え來し

四半世紀の今、神事となりぬ

○ めぐり咲く、盆事や人の世に

風雪梅花

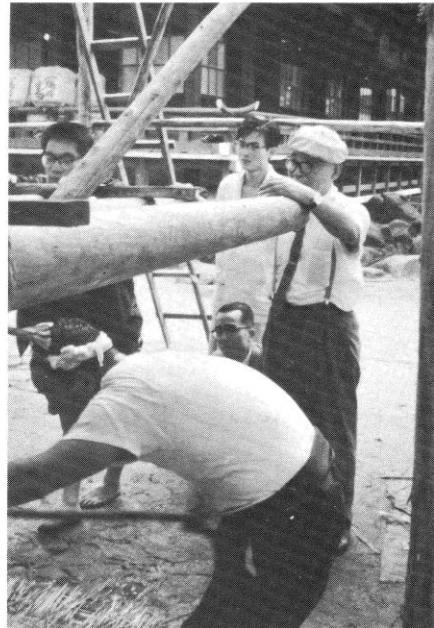
曲水の宴

昭和六十一年夏

岡部定一郎

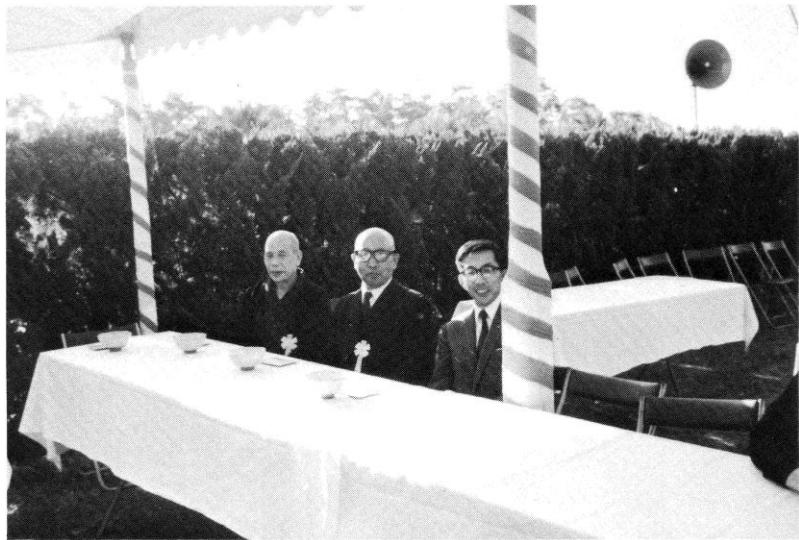


櫛田神社で番外奉納飾り山笠の製作指導をうけながら
棒洗いと棒〆
昭和39年夏



第1会各流合同野点茶会
於 かしいかえん
昭和40年11月3日





天与庵の平介清楽宗匠と共に
於 福岡城址
昭和43年



田中さんと最後のスナップ
福岡城址にて6流8席の盛大な頃の記念写真
昭和44年頃

「田中諭吉さんの思い出」

南区防犯組合長
町連会計幹事 岡本 孝

ると同時に、私達後輩の仕事にも以後大変影響を与えたようと思うし、その頃の事で私の脳裏に残っている事は、彼の企画力の素晴らしさは勿論、書をかかれても絵を画かれてもその頃社内で田中さんの右に出られる方はそう居なかつたんではないかと思つていました。

先日、田中さんの奥様よりお手紙を戴き故人の十七回忌の折に主人のお友達から思い出話などを集めて文集にして皆様にご披露したいので是非一筆をとのご依頼を頂戴しましたので、ほんの一端の思い出をふり返りながら、謹んで故人の靈に捧げたいと思います。

それにしても田中さんが他界されて今年で十六年の歳月が経過したと聞きほんとに昨日のように思い浮かんで来て只々時の流れの速さに驚くばかりです。

さて私が田中さんと最初にお逢いしたのは戦中の昭和十八年の秋だったと思います。私も東京の大学を卒業し、家庭の都合で帰郷し西日本新聞社に入社。そして最初に配属されたのが企画局出版部だったと思う。その出版部の幹部社員として田中さんはバリバリと張り切って仕事をしておられたのを私などは末席から眺めていたようです。そして半年程度経過して田中さんと机を並べて仕事をするようになり、その仕事振りに眼を見張

それから田中さんは博多生まれの博多育ちで博多の事は大変くわしいばかりでなく『博多にわか』も得意にしておられたようで、宴会の席などでは自作の面をつけて速興の『にわか』を披露され私達を笑わせたり楽しませて下さいました。このようにあらゆる面でいい先生だったし、こんな立派な先輩を持つたことを心から感謝しています。

最後に田中さんの面影を思い浮かべてみると、その人柄が身体全体に滲み出ていて人なつこい笑顔が忘れられません。では天国の田中さん今後も楽しくお過し下さる事を祈っています。



「無毛文化財の思い出」

博多町人文化連盟
事務局長 帯谷瑛之介

「水の宴」が一番美しいと賞讃、二人で中洲で乾杯したのが昨日
のよう思い出される。

田中さんの思い出はあまりにも多すぎるが、初めてテレビに
出て頂いた時、二ワカの落ちを先にしゃべってしまいしどろも
どろ、田中さんでもアガる事があるのを初めて見た事が印象深
い。

その後ある時、田中さんを紹介するのに、

『この人こそ本当の無毛（形）文化財です』と言つたらひど
く氣に入つたらしく、以後自己紹介には必ずこれを使っておら
れた。

残念なのは志賀の島に歯形の「歯科の碑」を建てる企画、宗
教上の理由で反対の歯科医がいて潰れたが今でもぜひ実現したい
い卓抜な企画だ。

残された最大の遺産は太宰府天満宮の「曲水の宴」。開始され
た時、私は丁度県の観光映画を撮影していたが、県ではシナリ
オから除外と大反対。私は田中さんと明治初年まで行なわれて
いた事實を楯に撮影強行、完成した映画を見て県の幹部が「曲



明朗なムケー文化財

「ゆーしやんの思い出」

団体役員 加藤常雄

「ゆーしやんが悪かげな。さあ行こう。」

と私の兄加藤藤次郎

にせかされて、野間神田町の御自宅に駆けつけた。御臨終の直後で、何時もの温顔で、それこそ眠るような最後であった。枕もとに、終生敬愛された福沢諭吉全集が半ば開いたまま有った

事が、今も瞼に焼きついて居る。

兄藤次郎が昭和四年に諭吉さんのいとこの内川トキと結婚してから私達とのお付合が、始まった。そして私が昭和十六年に義姉トキの妹である内川フミと結婚式を挙げた時に、諭吉さんにも頂いた祝辞は今だにありがたく、私の耳に残っている。

戦争が終り、たしか昭和二十三年頃大へん親しくお付合いしていた私たち従兄五人が水茶屋の料亭ふじ本に集まり戦争前後の憂さを晴らし帰りに諭吉さんを送つて御自宅に伺つた時、書斎に大百科辞典を始め多くの書籍が所せましと並んでいるのを見つけて大へん驚いた。

尚その時、非常に珍しいダンヒルの銀のライター付きシガレツ

トケースをお土産に頂いた事が忘れられない。

その後、昭和三十四年に兄が、市会議員に当選してから長い間の議員活動を続ける間、終始諭吉さんは、良きブレーンとしてその広い視野から、ユニークなアドバイスをして下さいました。色々と御指導を賜つた事を、兄は終生感謝して居りました。

今や田中諭吉さんの十七回忌を迎えるに当たり、兄藤次郎をはじめ従兄の内川良助氏や、榎本利吉氏もすでに亡く、私一人馬齢を数え世の無情を感じて居ります。

きっとあの世でも賑やかに「いとこ寄り」をやつてているでしょうか。

暴言多謝



「田中諭吉さんと言えば 勘亭流」

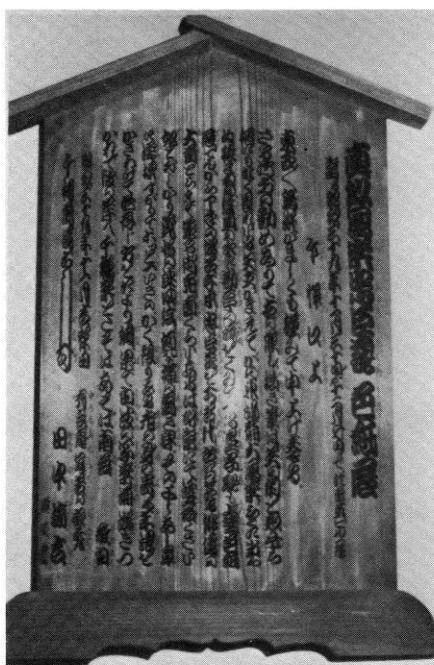
（有）博多精版印刷所 辛 嶋 鐵 也

当時私の家は代々石版印刷業でありましたので田中諭吉さんは父の時代より大変御世話になつて居たようです。田中諭吉さんと私の出逢は終戦後焼跡の瓦礫の中にボツボツ映画館や劇場が出来始めた頃でございました。

当時私の家は代々石版印刷業でありましたので田中諭吉さんは父の時代より大変御世話になつて居たようです。田中諭吉さんと私の出逢は終戦後焼跡の瓦礫の中にボツボツ映画館や劇場が出来始めた頃でございました。

不足する資材を何とか集めて石版印刷業を再開して居りましたので映画演劇の仕事を多くすくようになつて居りました。版下（印刷の下書き）の上手な人をさがして居りましたところ田中諭吉さんとの出逢になつたのでございます。当時日本で初めてキッスシーンのある日本映画が出来まして前宣伝をしたいと言ふ時にそのスチール写真が間に合はず仕方なく男優と女優の顔写真をハサミで切り取つてくつつけ合はせ何とかキッスシーンらしき物を作つて下さつたりした事が思い出されます。さて演劇のポスターには勘亭流の文字が目立つたもので大きく何々竜之助一座、何々太郎一座とか書いたものでございます。その勘亭流が画工さんでは仲々うまく出来ませず苦労したものでございました。

ざいますが田中諭吉さんは実に見事にしかも苦もなく樂々と書かれました。その見事な事、出来た書は本物でございます。私共はあのむづかしい勘亭流がこんなに樂々と正確に書けるものかと實に驚いたものでございました。毎回毎回非常に良いポスターが出来上がり劇場の人々をうならせたものでございます。おかげで当時人気が良く私の方が指定工場のようになりまして長年にわたり印刷の仕事をいただいたものでございます。今日でもいろんな方が書かれました勘亭流を見るのですがあの田中諭吉さんが書かれた正確で力強く見事な勘亭流は見る事が出来ません。おしい事だと思います。あの当時勘亭流の書体見本とか作られて出版でもして居られましたら今日でも見事な勘亭流が残つて居つたのに残念でなりません。



美事な勘亭流作品です。

驥駒首嘉鹿
獨犧芽画賛羅
織介貝灰圓珠
戒發怪界留齒
海城用齒塊會
解據緣外畫齒
勁茲慨振遂
高額多角革核

王決逐神螭
橫施崇宇乙
遠橫奧廣
者恩溫經少
化火亟加圓夏
果齒泛紫夏葉
家沒橫資薰
嫁暖過銀觸故

感憤漢盈管寬
緩憾還縮齒閑
勸躉缺環鑑觀
堤丸含岸企危
願巖因企汽奇
扒岐希忌氣貌
索衍絕軌氣貌
起鬼墓寄絲規

格孤客覺縱
獲獲較鄰隔
鶴御括劉獨
獨轉且掠刈
干刊日好完
眷官冠看乾勦
惠貴陷煥塞換
蔽棺款閭蘇

勘亭流作品

「田中諭吉先輩の思い出」

福岡国際ホール社長 川久保 敏彦

「田中諭吉さん」と呼んでいたのはついこの頃のような気がします。

田中さんが逝かれてこの七月、十七年忌を迎えるとお聞きして、月日がたつのは早いものだと驚いています。

田中さんは私が福岡日日新聞社に入社した時に、初めて職場で声をかけて頂いた方であります。その頃、机をならべながら、

田中さんのユーモアあふるる、しかもきわだつて高い、太い声を聞きながら、毎日を楽しく働かせて頂いたものであります。田中さんは企画力に富んだ人でした。当時の新聞広告は中央からの出稿が主で、「地元もの」はいわゆる付き合い広告でした。従つて何か企画を立て、それに協賛を受けるといったものでした。

田中さんは企画力に富んだ人でした。当時の新聞広告は中央からの出稿が主で、「地元もの」はいわゆる付き合い広告でした。従つて何か企画を立て、それに協賛を受けるといったものでした。

そこで、田中先輩と一緒に手がけた企画が、地元の神社に絵馬を奉納して、これに協賛してもらいました。この協賛企画は昭和十三年から十四年にかけて香椎、櫛田、住吉の各神社

への奉納とすすみ、筥崎八幡宮を最後として終りとなりました。

この最後の筥崎八幡宮への奉納を終えての帰途、田中さんは私に、「もうお神さまも終つた。次に何かあるかねえ」と、ひとりごとのように問いかけられましたので、私は「次は仏さまですね」と何となくお答えした次第です。田中さんは「仏さまねえ……」と考え込んでおられました。ところで、この瞬間に

田中さんの頭には、「支那事変戦没者慰靈祭」のアイデアがひらめいたのでした。最初は広告企画から思いつかれたこの企画が、福岡日日新聞社を挙げての大きな事業として展開してゆくことになるのです。これは博多湾の埋立地にテントを張り、臨時の祭壇を設けて、戦没者の慰靈を慰める行事でありまして、福岡県はもちろん九州各县の小、中学校の生徒を初め、善男善女を総動員する大企画となつたわけであります。

そのほか、田中さんと云えば色々な奇抜な企画が思い出されます。春吉の真髪神社の誕生、宗像神社の交通安全、そして、新天町の誕生など、枚挙にいとまがありません。

今日の近代化した博多の街、特に商店町として日本一と称せられる新天街などをごらんになつて、田中さんの御靈はどんなにか驚いておられることでしょう。そして、どんなにかなつかしい追憶にふけつておられることでしょう。

謹んで田中諭吉さんのご冥福を祈ります。

「ユーシヤン」

日本南画院理事 木原信

した。天井に画を描くことは何所でもある事ですが、賽銭を奉ずると同時に天井の鶴が高らかに鳴くとゆう独特のアイデアです。それも北海道の本当の鶴の声を録音して来るとゆう凝り性です。

日光東照宮には鳴き龍がありますが、こちらは鳴き鶴とはせず、謡い鶴がよからうとゆう事になりました。因に拝殿前の立て札を写しておきましょう。

田中諭吉氏。とゆうよりは、ユーシヤンと皆呼んでいた様に、あの親しみ深い面もちと豊かな体躯は人を引きつける獨特の風貌のもち主でもありました。

田中氏といえば直ちに優れたアイデアマンであるとゆう事も誰しもが是とするところであります。私が知っている丈でも数多くのアイデアの思い出があり創造の数々がありますが、

中でも太宰府の曲水の宴の創作の肩の入れ様は大変なものでした、私も何回か目に出演させて貰いましたが、フランク永井さん、吉田正さん達と十数名束帯女官姿で欄干に並んだ時は素晴らしい素晴らしい素晴らしいの連続でした。

糸島海岸の桜井神社の鳥居に螢光染料を施し、夜はライトをあてて海をバックにほのかな光りを表現する計画もあつた様です。

昭和四十一年のことです。田中氏より突然小生に依頼があつて、西公園光雲神社拝殿の天井に舞鶴の画を描けとゆうことであつた。

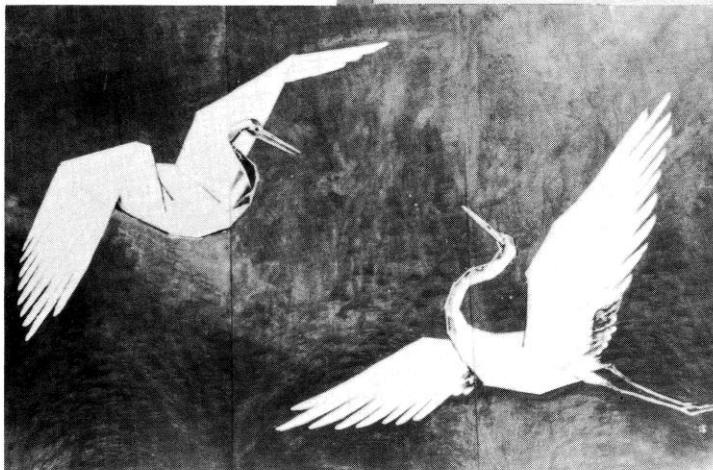
とにかく、田中氏特有の創造性は大変なものでした、現今に御存命であれば、福岡近郷に次々にその業跡が残されたであろう事は疑う余地はありません。

常に世の為、人の喜ぶ様にと願つての設計であつて、決して自分を表面に押出そうとしない人格の方でもありました。

黒田五十二萬石大名展

26日▶5月1日

西公園光雲神社の舞鶴図
—木原信先生 画



木原信氏作



「田中諭吉さんの思い出」

博多民謡協会会長 児島清

田中諭吉さんの思い出と言えば、一口に言えばばらしいア

イデアマンでした。福岡の色々な行事の一つ一つに田中さんの息のかからぬものはないほど世話の行届いた方でしたね。戦後間もない福岡の街の建直し、殊に新天町はその一つでした。

又あちこちの神社行事のお世話をされていましたので、その一つに糸島の桜井神社の後の海岸の二見ヶ浦の前に鳥居を建て、記念に黒田節大会などを思い立たれ、有志の皆さん達と奉納しました思い出。

太宰府天満宮の曲水の宴を復活されるなど、又香椎宮に勅使が来られるという六十年に一回しかない行事に、昔から博多長そうめんを奉上されてたとのことで博多長そうめんを、献上させて頂いたことも思い出されます。

又西公園の光雲神社の前に黒田節で有名な母里太兵衛の盆より水が落ちる手洗いの銅像の建立など神社の復元とアイデアの働きが、数々残され、今も故田中さんの業績が思い出となつ

て、有名行事として残っているのも田中諭吉さんのすばらしい徳の現われでありましょう。戦後間もない頃、市会議員の選挙の際、新天町より立候補された新宮大三郎さんの票を違わず当てられたとのこと、すばらしい頭の持主と賞讃されて最優秀の有名人になられたエピソードも思い出されるようです。とに角、そのようにコンピューターを頭にはめ込んだやうなアイデアと又ユーモアが又素晴らしいですね。そうした三拍子揃つた方でした。

亡くなられて十七年、もう少し長く元気で居られたらと今も残念に思います。そのアイデアとユーモアがコンピューターで出て来るような気がします。

でも残されたお母様初め御子息様御兄弟の皆様方が日本一の模範コンピューターとして御活躍されて居られることが何より御安心されて居られることでしょう。

ほんとに田中諭吉さんより引き立てて頂き、今も尚お家の皆様方から引立てて頂いて居りますことに感謝致して居ります。

「田中諭吉さんの思い出」

詩人 桜井公一

帰りもニワカやニワカまじりの愉快な話の連続で、笑い放し早くも着いた、もう帰り着いたと思った位でした。それからいろいろと個人的な事も教えていただき、私の歌集「雨」の表紙の字もその頃書いてもらつた田中さんの字に決めました。

又私の家の屋号の「大濠荘」の表札も裏表と書体を変えて書いていただき、今にかけています。

田中諭吉さんを一口で言えば、禿げ、丸顔、デブで大体私と同類項、ただ田中さんは黒縁眼鏡でした。

ところがその禿の下の味噌の精度に至つては、全く雲泥の差があり、私の味噌の様に粗製乱造型と違い、実に優秀で綿密で器用で又文筆に長じ、性懶る温容で人徳高く、ユーモアに溢れ、万人から親しまれ、尊敬された実に稀に見るヨカ人でした。

昭和四十三年春、私の郷里の桜井神社外苑二見ヶ浦に海上大鳥居建設の議が興り、私にその委員長をとの話あり、数日後桜井徳太郎先生がひよっこり来宅されましたので、その旨を伝え、協力方をお願い致しましたところ即座にそれは田中諭吉さんを紹介するから、お智恵を拝借せよとの事でした。数日後田中さんより電話がありまして、「桜井さんピカピカ光る大鳥居がヨゴザスバイ」との事。とにかく一回現地を見ましようとの事で、私の車で、徳太郎先生と三人で何回か桜井神社やその他を廻りました。車に乗るとすぐ早速博多仁輪加で笑いはじめ、行きも

或る時、私が田中さん宅を訪問した時、離れの方を指して、「桜井さんあの額何んと読みますか」との事、「有無庵ですか」と申しますとユーモアたいとの事、なかなか田中さんらしい考え方であり、起居の間常に笑いを忘れず一生を終つた人であつたと思ひます。

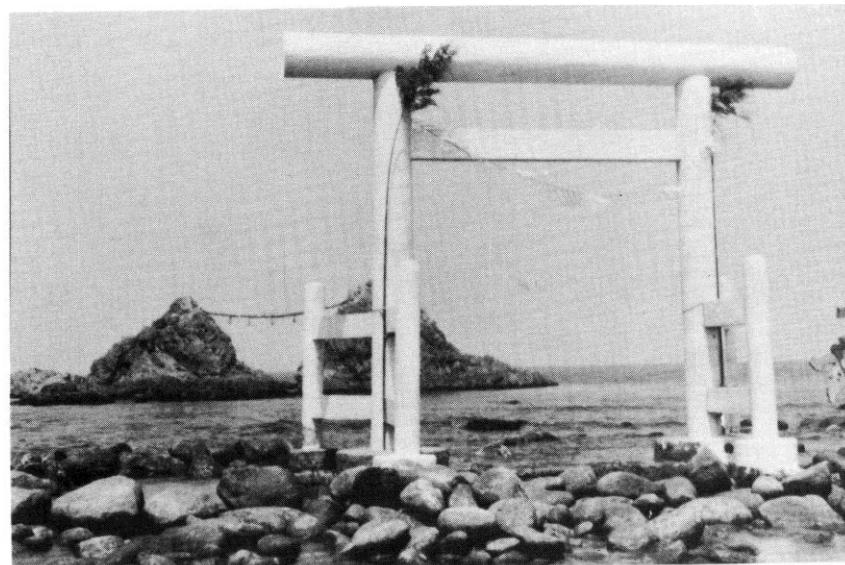
田中さんは位階勲等を欲する人でなく、全くの庶民で、面白く愉快に生き、人をよろこばせ、社会を明るくした人。福岡の生んだ蔭の大人物で、胸像でも建立して、その徳を慕いたいものです。

この度奥様から御連絡があり、今年は田中さんの没後十七年、何か想い出の記を作りたいとの事、双手をあげて賛成し、誠に不文乍ら一筆を認めて、田中先生の生前のご高恩に対し、感謝の意を表すると共にご冥福をお祈り申します。

大濠湖畔にて



二見ヶ浦下絵



糸島海岸 桜井神社 二見ヶ浦大鳥居

「想い出の諭吉さん」

凸版印刷
西日本事業部顧問 篠原雷次郎

今年五月、独逸ハーゲンベックサーカスが再度福岡にやってきた。前回は昭和八年八月で象五頭、ライオン十二頭、虎二十四頭、馬六十頭など合計二百七十頭、団員三百名という世界一

がいちばんよくわかつていた。

ハーゲンベックでの呼吸の合致は、其の後、「教育と実践の合一」を掲げて筆者が相次いで企画した「西日本商業学校、店頭装飾競技大会」でも画期的成功を収めた。

昭和初期、デパートや一部進歩的な商店を除き、ショウウインドウはあつてもなきに等しく、行人の注意を引きつけ、訴及し、購買意欲を喚起するには未だしの感があつた。

西日本新聞、江頭光氏は新聞その他「福岡意外史ふてえがつてえ」などで夢の大サークスを軽妙な筆で紹介している。昭和五年筆者は九州帝大法文学部を卒えると福岡日日（現西日本）新聞へ入社、直ちに東京、大阪の「電通」へ新聞広告の研究生として派遣されていた。筆者が何のコネもなく世界一の動物園とサークス王ハーゲンベック氏の胸に大阪で飛び込み、福岡公演を漕ぎつけ、意外な成功を収めた経緯を江頭氏は記している。入社三年目三十一才、今にして想へば、よくも思い切つたこと

をやつたものだと追憶に時たまふけることがある。併し細密な計算をした上であつたことも事実である。

その一つに当時本社に田中諭吉という、すぐれたアイデアマンで且、行動力を持った先輩が居ることを頭に書き同氏に呼吸を合せて、いたくことを期待していた。本社での調印式を済ますと田中氏たちに後事を托しその夜大阪に戻った。筆者はスパンサーとタイアップの仕事が待っていたのである。福岡での公演を成功に導くため、プロモーターとしての「諭吉さん」が果された役割が如何に大きかつたかは仕掛け人とも云える筆者

がいちばんよくわかつていた。

ハーゲンベックでの呼吸の合致は、其の後、「教育と実践の合一」を掲げて筆者が相次いで企画した「西日本商業学校、店頭装飾競技大会」でも画期的成功を収めた。

昭和初期、デパートや一部進歩的な商店を除き、ショウウインドウはあつてもなきに等しく、行人の注意を引きつけ、訴及し、購買意欲を喚起するには未だしの感があつた。

そこで広島以西全九州二十五の商業学校を動員し各々に二十の課題商品をあたえ、一チーム三人の選手を選ばせて当該商品販売店ウインドウに生徒たちは独自のアイデアを生かし陳列させ、予選の後、代表一チームを選び福岡での決選大会に参加させる。「諭吉さん」に秘かに相談すると双手を上げて賛成であった。結果は大成功である。

第一回優勝校に対する公私各方面より寄贈の優勝旗、優勝杯等トランク二台を連ね話題となつた。翌年第二回大会課題商品申込は二〇をはるかに越え詮衡に苦しんだ。

本大会実施面で「諭吉さん」の東奔西走、表裏の活躍は、氏の持前のタレントにも合致し目覚ましいものがあつた。

其他、商業写真、ポスター、新聞雑誌広告デザイン等レイ明期に於ける啓蒙活動等での「諭吉さん」の貢献は枚挙に暇がない。西日本新聞社停年退任後は「西広」「大広」等に招かれ広告畠を歩き続け本稿に書きつくせない業績をあげられた。「若禿」の福よかな面さしと博多弁で人々に敬愛された。「禿頭会」を組織して、町を賑はせたり、今に伝わる櫛田神社のお多福面くぐりでユーモアを博多の街一杯にふりまいた。昭和三十八年に創立した「曲水の宴」は延々二十数年を経ても尚盛になるばかりである。筆者も招かれて官人となり官女等に交り盃の流れてくる間、しみじみと提案者「諭吉さん」を偲んだことがある。西高辻宮司は田中美沙緒夫人がいま尚健在で詩吟に長ずると聞かれ、数年前から、琴曲弾奏のほか夫人の詩吟も加えられたと承る。何とも香はしい限りである。

児童文学者 武 田 幸 一

西日本新聞広告部での、田中さんとのおつきあいは、短い期間でしたので、これといって、記憶にのこるような出来事はありませんでした。しかし田中さんは、絵や筆文字のたいへんうまい方で、ポスターなど、自分でさらさらと書かれて、随分見事なものでした。

そのころ、西日本新聞に、毎週一回「月曜文壇」というページがありまして、私はときおりそのページに詩を書いておりました。どういうきっかけかはつきりしませんが、私の詩に、田中さんがさしえを書いてくれることになりました。田中さんの絵は、私の詩をひきたてて、それはすばらしいものでした。したがつて、私の詩と、田中さんの絵のコンビは、数回つづきました。今もそのスクラップがのこっていますので、時折それを見てはなつかしんでおります。

田中さんはまた、広告部で、いろいろな企画をたてるのに、すぐれた才能を持っておられました。「店頭装飾コンクール」を

「田中諭吉さんの思い出」

はじめ、神社への絵馬奉納など、まったくおどろくほど、行動にうつされました。

そういえば、たった一度だけ、田中さんと旅行したことがあります。これも田中さんの企画で、宮崎県の霧島神宮に鳥居を奉納するためでした。その旅行は、広告社の人たちや、一般の応募者をふくめて数十人、貨切列車で出発しました。霧島神宮で、鳥居奉納の式典をすまして、全員一応解散ということになりました。めいめい自分の行きたいところへ散っていきました。私は鹿児島まで足をのばし、天保山に宿をとりました。すると同じ宿で、田中さんにめぐりあい、また行動を共にすることになりました。そのとき、宿の窓から田中さんとふたりでながめた、夕焼けに赤くそまつたさくら島のすがたは、とてもすばらしくいまでもはつきりと記憶にのこっています。

田中さんはまた、至つて明朗な方で、旅行中でも、ごいっしょに居ると、なんとなくたのしい雰囲気にさそいこまれるような、ふしぎな方でした。

田中諭吉さん！この呼び名は私の後半生の生活にとつて限らない敬愛の念に溢ふれたものであつたし今もそうである。小柄で小肥りでいつ会つてもにこやかで心情の実に綺麗なかたであった。ベレー帽を無難作にまんまるい頭に乗つけロイドメガネをかけ、やや口早やな語りぐちはご愛敬そのものであつた。

昭和二十九年、私が筥崎宮の宮司になつてから私と田中諭吉さんとの交際は急ピッチであった。

と云うのは戦後人の心の荒廃し切つた世の中に心のうるおいを与える方法を考へねばならない、数多の人々が参集する秋の「放生会」の機会をとらへて祭の庭の雰囲気を親しみと懐しさと楽しさをどの様に構成するかが大きな眼目であった。

そこで考えついたのが博多、福岡に在住する文化人凡そ五十名を選んで書画の執筆をご依頼することになった。その相談相手が田中諭吉さんであった。

田中さんは御自分で絵を描くことまことに多種多様、その筆

筥崎宮宮司 田 村 克 喜

「田中さんと放生会」



の速さと絵のうまさは驚くべきものがあつた。

夏の暑い昼さがり、汗ばんで五十人の文化人を一軒一軒訪問しては揮毫の御依頼をしてまわつたことも忘れられない。

それが毎年つづいて今年で三十三年になる。

私にとって田中諭吉さんは八幡さまと大衆と私とのあいだの力強い橋渡しをしていただいた大事な人物であつたし今も私の心中に生きつづけて居られる人物である。



末永節先生、田村克喜宮司さんと 於 笛崎八幡宮

「父に代りて」

櫻井神社宮司 外山穰也

田中諭吉さんの奥様より私の父宛に、御主人の十七回忌にあたり思い出を書いて頂きたいとの御依頼がありました。

実を申しますと、私の父は昨年の夏に死去致しまして、残念なことなのですが、私は田中さんとは一面識もありませんでした。併しご生前父は田中諭吉さんの事はよくすぐれたアイデアの持主の御方だと話して居ました。

今年の夏の父の一年祭に際し、祖靈舎を整理して居ました所、田中諭吉さんの書による仮表装の掛軸が見つかりましたのも何かの御縁かも知れません。

幽冥大神
天御中主大神
與止妃大神

外山家之遠津祖神
諸々有縁之神

田中諭吉さん穩かに幽冥界にお鎮まりになりお守り下さい。

「田中さんを偲んで」

保存しています。

末尾になりましたが、ご遺族方のご健斗とご多幸を切に祈るものであります。

元 西日本新聞社
審議委員長 友人 中川原
高

田中さんの才氣、洒脱、多趣などについては、当時の吾々に定評がありました。

ここに、これらの諸条件にピッタリの好個の写真と文章とがあります。(執筆の依頼をうけて当時の写真帳を繻いて見つけたものです。)

これは、昭和十年十一月二十五日、当時東公園内にあつた料亭「一方亭」で催された、大概不二雄氏(故人)の福日広告部長就任披露宴の宴席で、当時広告部員であった吾々五人が、一回か二回の稽古で、余興として実演した「余太吹日五人男」の記念写真とセリフの文章です。これは田中さんの発案と企画に依るもので、各人のセリフの中には演者の姓名と略歴とが読み込まれていますが、これらは、すべて田中さんの指導と加筆とによつて成文されたものです。田中さんは「出来丸」を演じられましたが、そのセリフの文章と写真とを掲載いたします。

私は、これを田中さんの生前を忍ぶ写真の一つとして大切に



余太吹日五人男

御見得の場

一	遍	粗右衛門
輪	轉	小僧機械之助
只	呑	利平
赤筆	重	三平
何號出來		丸

(組右衛門) 間はれて名乗るも鳥居がましいが、生れは氣後三池在十九の時から親に連れ、身の管はひも中川原、薄尾花の風まかせ、江戸の街々呑みあるき、あればそれど非道はぞす、人の體に福日の磨告部にと招はれて、監視校正案内と、つまづきながら小石原、行けども驚きぬ大組の、理想は高し案の弓馬も面を脱ぎて、年も三十路に入合の、鐵の音かけて隠れのねえ仕上も一遍粗石衙門。

(機械之助) さてその次は福岡の、薬院の、稚兒あかり、不動着駕れた筒袖から、負けぬ氣性を折るよりの、浦志にかくしてしつぱりと務めは福日營業局、油断のなれえ磨告も、小組大組工場に、昇り下りも語くて、駆々駆れる活字娘、小島櫻の氏子にて、案内磨告仕事でも、命をステロのその名さえ、輪轉小僧機械之助。

(利平) 繰り後に控へは、耕の久留米紡績育ち、歌鬼の折りから駄目、小學校から出だし、旅に學んで西國を、廻つて首尾も松山の、高商移へ福日へ、足を踏むる江戸製、外交と云つて店々や、豪家に入りこみとりきたる、度重なつた磨告も、もう我社と本社づめ活字のぎょうものさしのはかつ田中の得意先、たまにはサービス與春利平。

(重三) 又の次に連なるは、以前は歩兵の上等兵、御國の爲の駄引きは、過ぐる滿洲の戰ひに、命裏加に生きのびて、駄引きなさけや君の體、心穎特く高畠、わたらそよ風福日、思ひはつもる深みどり、わが廣告の興廢は、活字一字の運びから、重き責務をますら男が、西日本をまたにかけ、肩に擔つていざ行かう、げにや修正恐るべし、その名も赤筆重三郎。

(出来丸) さてどんしりに控えたは、ママも福日ゆるぎなき、見なれの業も曲りなり、人となつたる案山子めが、インチキ道も不知火の魔界の縁盡人、時にひらめきありとも、弓矢でおどすむら雀、脊骨つてたゝれの職責は、其身に重き責務と笠、田の中育ちと云ふからは目に草のはえぬまで、智悟はかねてチャーナリズム、しかし活字は身につかぬ、筆でかこうが何號出來丸。



ヨウコニイ
「余太吹日五人男」 昭和10年11月25日

福岡日日新聞社広告部長 大槻不二雄氏就任披露会 於 一方亭

「恩人田中諭吉先生を偲んで」

かつら師喜一郎 長沢 吉太郎

本のあとがきに、福岡光頭会理事、福岡風俗文化研究会理事、田中諭吉として「かつらは永遠」との記事を戴きました。昭和四十年五月盛大なる会を催す事が出来まして私一生に一番の感激で生涯、先生の御恩を忘れる事は出来ません。今回先生の十七回忌に当たり深く感謝申上る次第で御座います。

文集より

「博多人気質」

富貞月亭
(波多江五兵衛氏)
(ベンヌーム)

暑くなると、ヒチ難しい郷土史の話では、皆さんもますます暑くなるばかりと思いまして、今回は実際にありました博多二〇加調のアハハハと笑つていただくエピソードを御披露することにしました。

劇への制作は取止めとなり他の理由もあつて第一線より退く事としました。其頃私は以前よりかつら製作の実技を本にしたいと少しづつ書き綴つておりました処を先生に見られ是非出版記念会をお勧め下され本の題名から表紙の絵、装丁に会場の取りきめ案内状等一切を御世話をされ、其の「かつらの極意」の

岩田屋百貨店の創始者社長の故中牟田喜兵衛さんが、開店前の百貨店店頭に今日はどの位のお客さまが来ていただかと、立つておられた時、のこのこと現れたのが西日本広告社の田中諭吉さん。

御存知の方も多いと思いますが、この人はアイデアマンとして、いろんな企画をたて、今まで年中行事になつてゐる「太宰府の曲水の宴」を戦後に始めた人である。

田中さんは見事なハゲ頭で、自分から福岡禿頭会の会長だと名乗っていた人、禿頭を卑下するでなく、自分と会つた人は二

度と忘れてくれぬだらうと、むしろ、天が与えた名刺代わりだと売りものにしていた、愉快で快活洒脱な博多人。

この二人が店頭でバッタリ会つたので、黙まりではすまない。大阪人なら「どうです、儲りまつか」「まあボチボチですねん」と言う挨拶が普遍的なものです、この二人はそうは行かない。まず中牟田社長が笑ひ乍ら、「田中さん、あなたはウチの店に来てもらつては困りますバイ」

「そらアなしですな」

「バツて、あなたの頭じや、儲け（もう毛）がない」

中牟田社長は、どうだと笑つておられたが、それで恐れ入りましたと引込む田中さんではない、ツルリと頭をなでながら、「私が来たら、店に光線（口銭）の入りますバイ」

中牟田社長は、「いや負けました、サアどうぞ」と社長室へ伴つて商談開始。

ちょうどその頃、博多埠頭が完成して、倉庫群が建ち並び、大型クレーンも設置されて、外国航路の船も続々入つてくるようになつていきましたが、

宴席で何回か中牟田社長と同席する機会がありました、皆さんから「中牟田さん、御得意の二〇加を」と所望されると「博多の港も大したものバイ、だんだん埠頭（太う）なる」が、レパートリーの一つだつた。

長沢吉太郎さんは、博多のかづら作りの名人で、舞踊のかづら、芝居のかづらなど、わざわざ名代の俳優が、博多まで来て、自分の頭に合うものを頼みにくるかづら一筋の名人芸をもつ人だつた。

数年前、自分の経験を生かして、かづら作りの本を自費出版され、その本の完成祝いを中洲で開らかたことがある。

集まつた人は演劇評論家、博多人形師、舞踊関係の人、それに私たち郷土史を研究している者、新聞記者など、普通の出版記念会とは変わつた顔ぶれが集まつた。その祝いの祝辞も、あり来たりの美辞麗句を並べたてたのでは面白くないと、原稿なしの博多言葉続出のザックバラン調で賞めそやしました。

その中で演劇評論や舞踊などに一家言を持つ、西頭三太郎さんが、博多二〇加で祝辞をやつたのが、今も耳に残つています。長沢さんは奇麗な女のひとも、つきあわつしやるケン、なかには好きやなア、と惚れる人もあつたろうね」「それが長沢さんは気の優しい、おとなしい人じやケン、自分の口から言い出し切らんで御座ろうね」

「イヤ、そらア心配しやんな、仕事がかつら屋のことじやケン、

好いたら（梳いたら）言うに（結うに）きまつとる」

悪口雜言の得意な博多言葉も、こんな使い方があつたのかと
一同大感心しました。一見冷やかし言葉のようでちやんと人柄
を賞めている中味参りました。

縦横に思うがままに使い分ける博多言葉、ときには下卑たも
のと思われつつも、その中に含まれた皮肉や批判、そして人を
なごませるユーモアは、博多人だけが持つ大切な財産だと思つ
ています。

表題の博多人氣質には、その一端しか触れられなかつたが、
又いつかの機会に博多人の大いなる行動について書いてみたい
と思っています。

「どうしょんなあとかいなア」「はよあがつてこんなア」「な
んしようとかいなア」「まあだこんつちやがア」「おうじょうす
るやア」「はよこんなア」これは西公園山上における、田中諭
吉翁の言葉でございます。

筑前琵琶總師範 中村旭園

「あたたかい思い出の博多弁」



昭和四十四年春、福岡市主催の「万葉歌碑除幕式」が西公園
の山上で催され、私共が琵琶を弾き、琴を入れ、香椎官の笙
を入れて、「荒津の舞」を演じた時、まだその頃は西公園の山
上からは、裏山づたいに海辺に降り、うぐ島までは歩いて行か
れました。一應、遣唐使になられた方が船に乗り、直ちに又、
山上に帰られる手筈になつていたものが、どういうわけか帰つ
て来られず、山の上から田中氏が声をからして大声をあげられ、
呼びかえそとされた時の言葉なのです。その剽輕な声と言葉
と動作に皆大笑いをして沸き返り、亡くなれる前までエピソー
ドとして「あん時は面白かつたなア」とくり返し話したもので
ござります。

その時に、「なーんもお礼の出けんけん、市長さんの感謝状ば
貰うて来ちゃつたやなア」と言つて持つて来て下さつたのが、

当時の市長阿部源蔵様からの感謝状で、筑前琵琶保存会理事長
中村旭園様、昭和四十四年五月一日となつております。けいこ場の
座敷に大切に飾つております。昭和四十年保存会を作つて、一
生懸命頑張つていた頃のことです。

尚この行事は、現在も盛大に催されしております「大濠まつ
り荒津の舞」のはしりであり、又私も『女房』として演じさせ
て頂きましたが、太宰府の『曲水の宴』のおこりも田中翁のア
イデイアと聞いております。

嘗て、冷泉小学校五十周年祝賀会に参りました時、奥様が詩
吟をうたわれました。その時の言葉「ふてーがつてー、家内が、
こげなことば、いつ勉強したとじやろうか、まあ聞いてやつて
んなざつせえ」私は何と暖かい紹介の言葉だろうかと、今も
忘れておりません。奥様に対する愛情一杯の言葉と思いました。
亡くなられる直前、西公園光雲神社の舞鶴館で荒津の舞の打
合せがありました。もう御病気でしたが随分お痩せになり、痛々
しいお姿にびっくりしました。ごあいさつをしますと、「もう大
丈夫、お医者さんもよかて、いいござるけん、もうすぐ元氣にな
るやなア」この言葉が最後で、それからお会いすることもなく
お別れとなりました。

でも博多つ児の私には、あの屈託のない、朗らかでいて優し

い博多弁のお言葉と、お顔と動作が暖かいハーモニーとなつて、
いつまでも心の中に浮び、懐かしく思い出されます。

きっと、きっと、雲の上の浄土でも、ニコニコと温顔を綻ば
して、博多弁を使い、楽しく暮していらっしゃるのではないで
しょうか。私はそう信じております。

合掌



「思い出」

日本郷土民謡協会
九州地区連合会理事長 西岡錦謡

グラフィックデザイナー
博多町人文化連盟理事長 西島伊三雄

「古き良き時代の大先輩」

「よつしや私が紹介しまつしょ」その日も暑い一日でした。昭和四十年八月当時、九州漫画協会でマンガを画く勉強していた私をつれて民謡教室につれていくてくれた田中諭吉さん。そのひとことが今日の私につながったと確信しています。「二兎追うもの一兎も追いえず」のことわざがありますが、そんな私

にふんぎりをつけさせてくれた田中諭吉先生の十七回忌に改め

て御札を申しあげたいと思っています。思い出はつきません。

私が、田中諭吉翁を知ったのは、浜口町の「トヨタ図案社」の弟子の頃ですから、もうかれこれ五十年位も昔のことです、しかも豊田先生の御友人であつたようで、先輩も先輩、近か寄れない大先輩ですし、「思い出」などと言うのはおそれ多い感さえいたします。

福岡の広告界にとつて、はたまたデザイン界にとつても大先輩で、その面白い奇知に富んだお話を遠くから聞かせていただいた程度です。昭和の初期頃「どんたく」に博多では初めて洋楽器を鳴らして、私の先生や、天竜の故大塚金次郎氏などと出られたことを聞いたことがあります。当時ではなかなかハイカラな人たちだつたのだと思つたりしたことです。

太宰府まで「わらじでお詣りする会」や、今も続けられている「曲水の宴」。「禿頭会」や「食べ物の試肝会」などの企画は有名でしたし、私は、岩田屋の屋上で戦後催された「かかし大会」に「ヤキトリ」をぶら下げて、「君たちの最後」などとやつ

合掌

たのを覚えていります。櫛田神社々殿「破風飾り」の風神雷神アカンベーの絵を扇子に描かれたり、筥崎宮の大灯籠の綿絵も、たしか描かれたように聞いています。それから歌舞伎文字が上手であったのは感服していました。

今となると、もうすべてが幻のようにさえ思われ、記憶もどんどん薄れてしましましたが、博多つ子の氣性そのままで、サラリとして面白く意味の深い企画の数々が、しみじみと私の青春の思い出の中に残っています。

もう、あんな素晴らしいアイデアと行動力を持つた方は出てこないであろうと思うと同時に翁を思い出すことによつて日本の古き良き時代を偲んでいます。



「私と諭吉さん」

博多人形師 西頭哲三郎

私と諭吉さんの出会いは與一先生に修業中でした。よくなどくとくの声で、與一さんはおられるな、と言つてこられ先生は、諭吉さんが又なんかアイデアをもつてきたばい、と言われていたことを思い出します。

色々ありましたが私に思い出すのは光頭会。酒祭り小倉の玉屋デパートで黒田武士の頭身大の山笠人形的なものを飾りに行き、帰りに諭吉さんと飲んだことが頭に浮びます。

諭吉さんは博多の人々に皆、アイデア人としてしたわれていた人で、もし現在おられたら、大変な博多の発展になつて変つた事と思います。又私にとつては、亡くなられて三年になつた時、奥様がこちらで和楽路会と言う歩るく会の旅行姿の写真をもつてこられて肖像をつくってくれとの事でした。何分諭吉さんは、よくお逢いして気持ちも知つていましたので造る事を受けしました。作品には肖像の時は本人の気分が出る事が一番です。づばり言うと、諭吉さんは昔ののんきな父さんの気分の

する人で心のおおきい、やはりお父さんのようです。

博多人として心に残る人でした。又私の小島與一先生の亡くなられて十七年で同じ年でした。

諭吉さんの御冥福をお祈り申し上げ筆を止めます。

合掌



田中諭吉博多人形 西頭哲三郎氏 作

「諭吉さんの思い出」

西日本新聞社顧問 野口義夫

田中諭吉さんは、私の生涯で、忘ることのできぬ人である。

諭吉さんは、肥満、短足。お世辞にも、スマートと言えなかつたが、光り輝く頭（博多光頭会々長であった）常に微笑を湛えているあの丸い顔、ウイットあり、ギャグを交えた話術は、人を魅了せずにはおかなかつた。戦時中の暗い職場が明るかつたのは、諭吉さんのおかげであつた。

東京生れ、東京育ちの私を、博多になじみ博多ツ子にすべく努力していただいたのも、諭吉さんでした。現在の興銀支店の横丁にあつたお宅に招かれ、「博多の朝は、オキユウト賣りの声で目をさまし、朝粥すすつて、一日の活動が始る」とか、博多雑煮、栗の箸、がめ煮など、博多の生活習慣など教えられた。どんたく（当時は招魂祭）山笠、放生会の話も聞いた。お祭り好きの博多は、芸所博多と言はれるほどに、庶民に芸能が普及している。諭吉さんも、博多ツ子、にわかよし、唄、踊りよし、寸劇よし、川丈の緒方さん、波多江の秋武さんとともに、余興

関係多士済々の中の三羽鳥と言はれたが、諭吉さんが常にリードーシップをとらっていた。

諭吉さんと戦時中仕事を一緒にしていましたが、立派なアイデアマン、その企画で、戦争激化の中で、立派な業績を残していました。昭和十九年のことでした。広告募集のため、筥崎宮に必勝祈願の絵馬を奉納するという広告企画、神罰をも恐れぬことと反対する者があつたが、スポンサーの協賛をえて、大成功を収めた。西部軍司令部より賞詞をもいただいた。

諭吉さんほどのクリエーターは今日でも少ないとと思う。

今私のところには、KBC名士劇出演記念の、小島与一作、荒津花五郎人形像、に勘亭流で名前を書いたのが、遺筆としてある。

諭吉さんが逝つて十六年というが、私の脳裡には、「ほほえみつつ、セカセカ歩いてくる姿」が、今日なお生きている。



「懐かしいあの笑顔」

作家 原田種夫

優れたアイデアマンであつた。田中諭吉さんが、亡くなられ

てから、早いもので十六年も経て、本年九日で十七回忌になる

ということだ。田中さんと親しいおつき合いはなかつたが、わたしも、西日本新聞社に勤めていたので、よく顔が合つた。田中さんの禿頭と、あの懐かしい笑顔は、まだ鮮明に、わたしの内部に生きている。

わたしには、田中さんは、大へんな活動家に見えた。いつも、せかせかと動き廻り、なにかしているられるように見えた。いろいろのことを思いつき、それを一つ一つ実行に移されたのはなかつたかと思う。名アイデアマンとして令名高い人であつた。禿頭会をつくり、自らその会長をつとめておられたと記憶している。たしか、宗像神社を交通の神さまとして宣伝し、社運の発展に貢献されたように覚えている。

田中さんの名アイデアによつて恩恵を受けた地もとの商社や企業体も少くなかつたと思うが、わたしは、その詳細を知らな

い。何かアイデアに関する小さい書物を出されたことをほんやりと覚えている。不確かな記憶だから思い違いかもわからない。親しい接触がないので、田中さんのことをくわしくは書けない。

ただ、あの懐かしい不斷の笑い声と、禿頭と、いつもコマ鼠のように動き廻つた田中さんを忘れることが出来ない。それと、あの絶対に憎めない、人なつっこい性格は、当今珍らしいと思う。いまは、心から、ありし日の田中さんを偲び、その御冥福をお祈りするばかりである。



「田中諭吉先生の事」

名菓千鳥屋社長 原 田 つ ゆ

私にとって、一番印象に残つて居ます田中諭吉先生とは、美

事なつやつやとしたピンク色の禿頭と童顔のにこにこ顔でござ

ります。

確かに西日本新聞社にお勤めの頃からのお付合で、あつたかと
存じます。

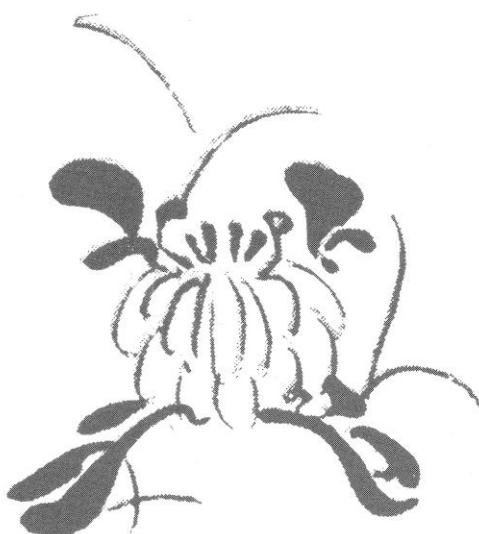
先生は何事につけても円満で人の面倒見もよろしく大へん誠
意のある御方でした。

ある時先生の御紹介の易者さんから南の井戸の水を汲んで居
間に置いておくと良いと云われ、蓋付きのかめに入れて居て
おりました。先達つて、税務所の人が私の居間で調査中に何と
なく視線がそこに行くのです。何かとても大切な物が入つて居
ると思ったのでしょう。私が座をはづした時に、事務の人と二
人でそのかめを引きよせて中を見ようとされたら、水は一杯で
なかつたと思いますが、蓋が有るのに、水がこぼれて居ました。
税務所の人はあわてて何だかあまり悪そうにして居られました。

私はその壺を見る度に田中諭吉さんの事を思い出して居ます。

又御自分の禿頭を自慢になさつて、春吉に髪の神様をお祭り
し、禿の会を作られて、禿て居る人程えらい人だと結構楽しん
で居られました。私も一度その会に招待された事があります。

普通、男の人は禿を気にして隠す事に、気を使いますが、反対
にそれを自慢して、朗らかに、人に愛され、喜ばれる様に勉め
られた事は、田中諭吉先生ならではと本当に、尊敬されるゆえ
んと思います。大へん愉快な御方でした。



「諭吉先生を偲ぶ」

太宰府天満宮欄宣 御 田 義 清

ケン、おはらいばつかりせんで天満宮さんの繁栄さつしやるごと智慧ばしほってんなぎつせー」と言われましたが、その時まで太宰府と曲水の宴とのつながりなど恥づかしいことながら全く知りませんでした。

田中先生が亡くなられて本年十七回忌を迎えたということをお聞きし、今更のように月日の流れの速さに驚かれます。

先生と私との「出会い」は昭和三十年の初めごろだったと思いますが、福岡市と郡部の観光連盟の会合で宮地嶽神社にお参りし、津屋崎での宴会の席上、先生がステージに立たれ「諭吉さん……諭吉さん、あんた一番乗りで宮地嶽神社にお参りしなさったが、どうした足の速かもんかいナ……」

（先生は秃げてつやのある頭をなでられながら）

「そらし速かクサ、ツヤサキ（津屋崎一艶先）に行く」……

とニコニコして、ステージを降りて行かれる姿が印象的で脳裏にコビリついて忘れることができません。

又先生は秀れたアイデアの持ち主で、太宰府天満宮の曲水の宴は氏の着想であります。昭和三十七年の春ごろだったと思いますが、先生がひよっこり天満宮においてになり、梅花の下で曲水の宴ばしたら風雅でよござすバイ。あなたは神主さんじや

調べてみると当宮との関係が深く、中国で今から一、六三年前文人墨客が蘭亭というところで催したと記されており、わが国では宇多天皇（平安時代）のころ定められ、天満宮では村上天皇の御代太宰大式小野好古（よしふる）が行つたことなどの詳らかなる史実を知り得たのは全く先生のお陰でした。

太宰府天満宮では大広に勤務されていた先生のアイディアによる企画がすすめられ、昭和三十八年の三月第一日曜から始らることになり本年第二十四回目を迎えることになりました。

太宰府のお宮の境内、六千本の梅花が咲き初むる頃になると、白梅のよう清純なみ心と紅梅のよう情熱とウイットをもためていたニコヤカなお顔が忽然として、曲水の宴庭に浮かんでまいります。

先生の靈界でのご活躍を心からお祈りいたし、私たちに素晴らしいアイディアの花びらを天界より降り注がしめ給わんことを願つてやみません。

西日本最初の試みとして大盛況を博した豪華けんらんの大絵巻。
本年は明治100年を記念してさらに由緒ある新趣向を併催して展開。
約千年前太宰府天満宮で行われた古典行事の再現と初めての試み大雑まつり

大宰府天満宮観梅清酒まつり 別 種 第6回 曲水の宴 (流觴) ごくすい 生写し雛まつり (記念特別併催・詳細は別紙に)

主催 太宰府観光文化協会・福岡風俗文化研究会
後援 福岡市観光協会・西日本鉄道株式会社
協賛 九州美容文化研究会・提供清酒花の露富の寿・萬代
とき 昭和43年3月3日(日曜)一雨天の場合同月10日(日曜)午前11時より開始
ところ 太宰府天満宮神苑文書館及び同館横「館玄關雕櫻・梅林中には曲水の庭や設置」
◆次第 1.王朝時代風流衣裳接待会 2.御酒奉獻 3.行司列座典 4.神頌 5.曲水 趣事、櫻や
1.生写し雛まつり(午前11時から)2.神酒奉獻 3.行司列座典 4.神頌 5.曲水 趣事、櫻や
の儀(正午)6.曲水の宴(午後7時頃から)10.うなぎけり集2.かたけげて前 3.後雅樂、拂索を奏す
1.～4の会場に於て古典公演には沙羅双の舞・鈴の舞・白拍子舞・如意郎君
解説提供、着付指導、福岡風俗文化研究会長・松原友綱氏ほか千数名
衣裳提供、化粧舞台・九州美能文化研究会長・松原友綱氏ほか千数名
参観着付進献、1.衛士(2名)2.神官(神酒捧持)3.巫女(千早は毎御度)4.舞(十二年女2名)5.公卿女房
(小早御度3名)6.白拍子(山代は水千利・水千利・水千利)7.童子(稚鹿男2名)8.僧侶(嵯摩寺2名)9.講官
(名上衣冠束等)10.白丁(白表少年10名)11.稚鹿(伶人御も歌名)12.穿直・大袖被・13.蓬
發舟脚(並仕申歌名)13.和歌朗詠(神代陽光女史・正祖良)14.清酒樽(古江・島田・他)
変身舞(並仕申歌名)15.和歌朗詠(神代陽光女史・正祖良)14.清酒樽(古江・島田・他)

◆曲水の宴と太宰府天満宮競起について

この宴は宇多天皇貞永年間(870年頃)正月に定められたが、元末上巳にいつづれ三月最初の巳日に行なわれる
おりまたそのことから天皇天孫(そらのみの天孫)に「御子(みこ)」と称され、歌を曲くわなを流れる水上に舟をついて
流す禊祓(みそはらはらひの儀式)といつています。流す禊祓はその御子の水没さへから參泉の御官香爐(ごくわうろ)の上流れ、流れる
くる岳が自分の前に過ぎながら、詩歌をつくって、此をいたたかく「後向(ごむか)」と唱はして、また呂くら左(すゑ)で舟を行なわれた
ところ記録されています。この曲水の宴は中古古来の服装(ゆか)と云ひ、永和9年(253)3月3日春禊
王羲之(しゆぎし)の41人の名士達が浙江諸縣の蘭亭(らんてい)であつて、王羲之(しゆぎし)が禊事と詠め詩を賦した二年の書
道の拓本(とうほん)が有名であります。

わが太宰府では酒を喫した大年の卯(卯酉)大伴の卯(卯酉)大伴の卯(卯酉)ではないかとも思われます。管公の時代は號で呼ばれ
たから、公の父で、花井の父は号(ご)の事で、而(めで)て名(めい)は花井の事で、花井と号(ご)でも、東風を吹きむしと豪吉
といひます。天満宮の御祭(ごし)にはやはり天皇の御子(みこ)と云ひ、神酒(じんしゅ)は往々より柏屋源兵衛の所蔵として每年この
村(むら)を勧めめたので、地名を現在(もし)酒殿(さけどの)といわれています。
本年再現は本年をもて第6回を迎えたが、本年は明治100年に当りますので刷紙(よう
に)生写し雛まつりをこの三月三日曲水の宴(せん)とともに行なう予定であります。
この二つの催(さい)の再現は、あかしのままの方法でないでこそ、日本が世界に誇(ほこ)る風俗文化を文教の祖
神菅原道真公(みちまこと)の神廟に掛け懸(かけし)け奉(まつり)せて、王朝時代の精神を現代多數の人びとに知らせ
平和日本を意義(よのぎ)あらしめたく期(とき)すものであります。

文書企画 大広 九州支社 (福岡市天神)丁目2、電74-2061]

曲水の宴 P R 作品 田中諭吉 書



曲水の宴 成果は如何に…。

筆勢如流水
文意如梅花
画・文 田中氏



明治100年の3月3日(端午節句)を寿ほぐ
曲水の宴を盛んにする最初の試み!王朝風俗扮装による雛人形ぶり
「生写し雛まつり」 3月3日前11時より太宰府天満宮
文書館玄関前特設大雛壇(同次の掲示)
(10日未定)

「雛まつり」という呼び名は雛人形をかざるよになつてから、稱えられたもので、垂仁天皇の御代、菅公の御祖、野見宿禰命が天皇薨去の際に行われていた殉死にかけて、埴輪(はなわ)を御陵墓に立てたとお傳言して、はじめられたと主偶人形を起源とし、日本古来の信仰である人身の無事、厄災を祈る祓禊(はらみ)にござせて、人の形をつくつて自分の身体をなすて、これに自分の罪けがれをおあせて身がわりとして川に流す古俗は、倭寇(いそく)七虎(しちご)の草人形をつくつて五十鈴川に流したという伝承をもち、古來中國に伝えられたこの三月三日に行われる「曲水の草」。と密接不離な年中行事となつたのであります。

この節目に供餅を供えることは平安時代からといわれ、これじの供物を翁供といいのちに、せつく(節句)となりました。

美わしきこの雛まつり行事は、明治初期になると、五月五日の端午の節句と共にさらに民衆化され、今日にいたっています。人形は最初大名などの上流では等身大のものを飾ったが、から、幕府の貴族があつて、小百姓の雛に統一されました。

雛壇は九段(さぶらん)はてて、雛の毛髮(け)を打散(はさん)だとして、最上段は金屏風(きんびやう)をきて、その前に内裏雛(うちりひな)と對(むか)へて、左端(ひだりはん)は右(う)左(さ)の順位(じゆい)を三方に(のせ)、その前にかく、次段は三人官女(さんじんかんじょ)の姿で、左(ひだり)から右(う)へて右(う)は右(う)、左(ひだり)は左(ひだり)を飾る。三段目は五人(ごじん)の雛子で、これは能の唯方(いふがた)の位置と同じく、向(むか)へて右(う)から左(ひだり)をもてて歌う者、次が笛(ふえ)、中央が小鼓(こがい)、次が大皮鼓(だいひがい)、左端が大鼓(だいがい)を並べる。四段目は體育(たいいく)の神道(じんとう)の隨神(隨神)になづらひるもの)向(むか)へて右(う)に社主(しゃしゅ)、左(ひだり)は年長者(ねんじょうしゃ)をおく。社主(しゃしゅ)は細(ほそ)い赤(あか)い腰帶(こし대)をまつて、年長者(ねんじょうしゃ)は黒(くろ)い腰帶(こし대)をまつて、二人の間に青(あお)い白(しろ)い舞衣(まい)をはらはらし、白酒(しろしゅ)など五段目(ごだんめ)には術士(じゆしつ)三人、左右に桜(さくら)の葉(は)の花(はな)や、船(ふね)をひいて飾ります。

また、重箱(じゆばこ)、裏箱(うりばこ)、枕箱(まくはこ)、御所車(ごしょしゃ)など最下段にござります。

この前で着かざる様さん達は、白酒(しろしゅ)や菱餅(ひし)を頂き、お料理をたべ歌をうたい辭をよみ終日楽しく遊ぶのです。

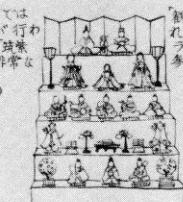
この「生写し雛まつり」は午前11時予定で行い、次の曲水の宴に移りますので、約1時間で終りますのであります。振袖(ふりしゆ)等の余興(よぎ)や、盆(ぼん)の花(はな)、盆(ぼん)の囃(は)き、盆(ぼん)の踊(はな)り等の盆(ぼん)の行事(ぎじょう)もござります。

この「生写し雛まつり」が終りますと、この扮装(ほんぞう)の平安歎俗(へんげんぞく)などの皆様(みなさま)は直ちに曲水の宴(うどん)に参加(さんか)されるのであります。

当日は太宰府天満宮では、遊(うき)で俳句(はい)大会(たいかい)が行(は)われ、終(まつ)るまであります。振袖(ふりしゆ)等の余興(よぎ)や、盆(ぼん)の花(はな)、盆(ぼん)の囃(は)き、盆(ぼん)の踊(はな)り等の盆(ぼん)の行事(ぎじょう)もござります。

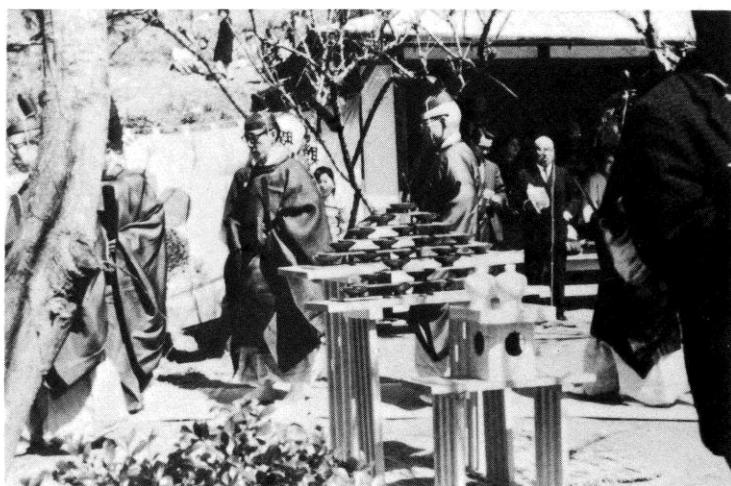
なお、開催(かいさい)日程(じきよう)は、まだ未定(みてい)で、非常に多いです。

なお、開催(かいさい)日程(じきよう)は、まだ未定(みてい)で、非常に多いです。



企画

大広九州支社





梅花に平安の昔を偲ぶ



智将奮斗曲水之宴



家族も動員（四男 崇和）

家族も動員、今東光氏と真理恵娘



進行如意 心中多少 快哉

「田中諭吉様に感謝」

金剛沙門 安川 恵妙

或る時、私が「田中さんは大変調法な方ですね」と申したことがあります。その後田中さんが「私は調法にござるもんな」と云つていますと皆さんのが前で云つていられましたが、皆さんも同感であったと思います。

それから一ツ、ユーモアに富んでいられた田中さんに一本やられ参つたこと

田中諭吉様 貴男のお姿を見ることが出来なくなりまして、もう十六年もたつて仕舞つたのですね。でも何か事あるときは、いつも思い出されるのは、ああこんなとき、田中さんがいて下さつたならなあ。と云うことです。そしてあの独特のどつしりした。お姿と、すみませんね……と申しあげると、「よござつせにやことい」と云う、お言葉です。一人で細ぼそとやつていました。洋裁学院時代のころ、何んでも彼でも、相談したり、書いて頂いたり、いたしましてどんなに助けて頂きましたことか

又仏門にはいりましてからも色々と相談にのつて頂きました。

その頃田中さんが「私は信仰はしませんが、神社やお寺が繁盛する様に考えてあげるのが好きですたい」と楽しそうに話して下さいました。例えば太宰府天満宮の曲水の宴、節田神社の福くぐり、香椎宮の野立の茶会など。かぞえてゆくと限りありません。

私は恥しさと申し訳なさで早々に起きあがり死してまで、私を見守つて下さる愛念に感謝の気持一パイで、あらためてお詣りさせて頂きました。その後も時折りお宅に伺いお詣りをさせて頂きますと必ず、あのユーモラスの博多弁で言葉をかけて下さるのが楽しみでございます。

きっとあちらの世界でも沢山の靈達に調法がられていられる
ことと存じています。
「人は皆、人によるこびをあたえそれをよろこびとするよう
になりたいと思うこと節でございます。」



「田中さんの思い出

ニコニコ戦闘機

フクニチ新聞論説顧問 柳 猛 直

田中さんが話題になると、だれでも二つや三つ奇想天外の思い出を持っていた。たいてい「田中さん」とは言わない「諭吉ツツアン」である。この呼び方が、あの丸い、人なつこい笑顔と素適に回転の早い思考力にピッタリ合っていて、どうも「田中さん」ではビンとこないのである。

田中さんは、ぼくの父の友人であつたし新聞社の大先輩でもあつたから、ぼくも、かげでは諭吉ツツアンと言わして頂いたが、もちろん面と向つては「田中さん」である。しかし田中さんは、ぼくらにも本当にやさしくして「さん」づけて呼んでおられた。田中さんは、だれに対しても態度の変わらない人だった。威張るなどということは全くない、というより「威張り」の精神というものが全く欠落していたような人であった。ぼくが知っている威張らない人に火野葦平さんがいた。しかし火野さんは風貌でずいぶん誤解されていたが田中さんは見るからに人なつこい風貌で初対面の人もひきつけた。

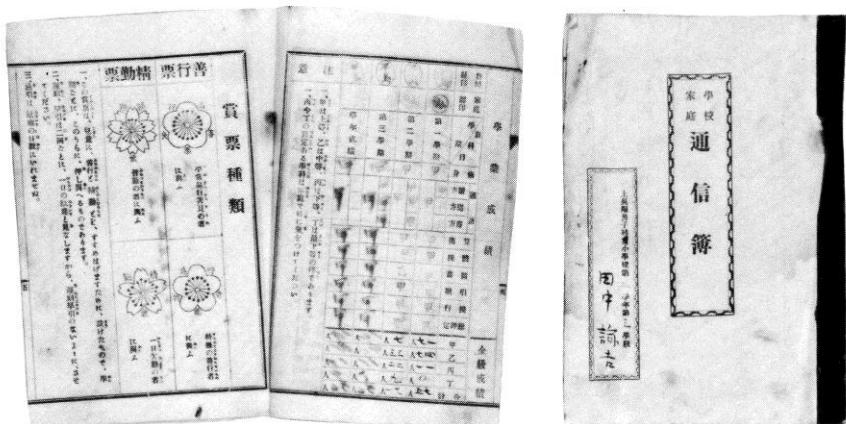
田中さんが稀代のアイデアマンであることは、よく知られていたが特に日本人の精神に強い影響力を持つている神社というものを利用してユーモアのある巧みな演出で数々のヒットを飛ばした。今も続いているものに宗像神社の交通安全のお守りや太宰府天満宮の曲水の宴等がある。そのほか一々あげていたら、きりがないくらいだ。

町で田中に会うと相当離れたところから、あのニコニコの笑顔で手をあげて「柳さん、こんど、こげなとば思い立つりますやなア……」と歩きながらの話である。立ち止まらないので当然、すれ違う。要領のいい話だから、だいたい内容はわかるので「そらア、よございますねエ」と言つた時は、もう田中さんの丸っこい後姿がスタスターと遠くなつていく。という工合であつた。

戦闘機の交戦は双方がババババと機関砲を射ちながらビューンとすれちがう一瞬の出来ごとだそうだ。田中の立ち話といふより、すれ違い話に、いつもこの戦闘機のことと思い出して、おかしかつた。とにかく忙しいんで次から次に浮かんでくるアイデアを消化するのに、ぐずぐずしてはいられなかつたのである。

それにしても、もう少し長生きをされて福沢諭吉の一万円紙幣が出たころ田中さんが健在であつたら、それこそタダではすまされなかつたにちがいない。きっと、「諭吉まつり」かなんか

で九州漫画協会を大いにあふつて一騒ぎあつたに違ひない。残念である。



「謝 辭」

福岡県婦人新聞社社長 八尋寿和子

当時美沙緒夫人が、福岡市地域夫人会の校区会長にご在任中より、ことの他ご親交賜わりましたご縁もあり、この度のご文面は一層嬉しく拝見いたしました。

諭吉先生ご他界以来はや十七回忌をお迎えになられます内、「禪門諸祖偈頌」のたとえの如く『逝水の流れ関守なし』まこと歳月人を待たずの感が一層身近かに思いしらされます。

昭和三十七年婦人新聞創立十周年記念の祝宴にご出席頂き、私にお祝いにと書いて下さいました社名の御筆蹟が、今も本紙の貴重な「題字」として、社歴と共に大切に遺され、先生のいのちの灯を、守り続けております。生前諭吉先生のご企画が実を結ばれました、太宰府天満宮の「曲水の宴」で毎春神苑に流れる美沙緒夫人の朗詠を耳にいたしますとき、なにか今は亡き夫を恋うるご心情か偲ばれ一層感慨深く拝聴させて頂いております。

ます。

生前商工会議所でパツタリお逢い致しましたときは、お顔色

もすぐれず、ご案じ申しあげておりましたが、いつもの百万弗の笑顔で、「八尋さんよく頑張つてますね!」とお優しいお励ましを頂いたのが先生の最後のお言葉となりました。その折りも何か新しいご企画に取組んでおられたご様子で、その気迫に満ちた変らぬファイトぶりには頭が下る思いでお聞きしたこと覚えております。

ユニークな素晴らしいクリエーターとして、そのご才覚が充分に燃焼しつくせなかつたご無念が今も惜しまれてなりません。もし今も先生がご健在だつたら、まだまだご指導賜りたいことばかりでした。

いつも温かい先生の人間性にふれ、未完成な者への先導者として、常に前向きに明るく社会の為にご貢献遊ばした、かけがないのない人生へのご挑戦ぶりは今も私の胸中に生き続けております。以来十数年の歳月の流れを共に、お子様方もそれぞれに立派にご成功なさり、今では美沙緒夫人も、私共と共に中華民国への歓しい表敬訪問の旅の想い出や、施設へのご慰問など有意義なご奉仕活動に生き甲斐を求めておられますご様子、諭吉先生も嘸かしご満悦のことと推察いたされます。

ここに諭吉先生の十七回忌をお迎え遊ばされるに当たり、心からのご冥福と限りない謝辞にかえてご追悼の言葉にさせて頂きます。

「諭吉さんとの縁で生れた 一大行事の裏話し」

西鉄エージェンシー S・A・B・D 中 島 康 博

親しさの余り、あえて諭吉さんと呼ばしていただきますが……。昭和三十六年当時、諭吉さんは、光頭会や、銀髪会などで、博多に話題を撒いて東奔西走されていた。何かいろいろお話しを伺つた後、「それならうち（当時の大広九州支社）に、来ませんか」と云うことが私との縁のはじまりになりました。

その一 曲水の宴

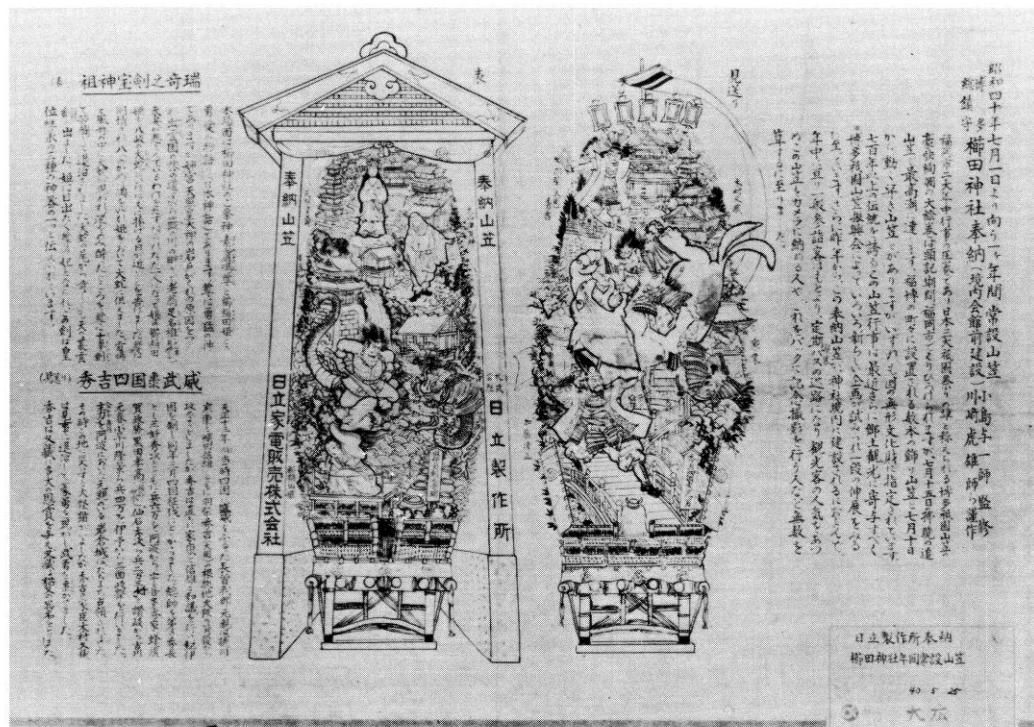
或る日、諭吉さんが古びた一冊の本を持参されて、ページをめくつて「こげなどば天満宮の池で、どうでつしようか」。拝見すれば、王朝絵巻風の装束で、鴛鴦頭の船に座乗したみやびかな雅楽と舞の絵図であった。ところが検討の結果、天満宮の池で実施するには難点が多く、この延長線上で論議している中に、水に繋がるが一転して陸に上った「曲水の宴」の発想が出てきた。そこでかねて親しく願っていた。九大農学部の造園計画では権威者の加藤退介助教授（後に教授）の許に飛んで行つて「曲水の宴」についての教えを乞うた。先生は当時、大牟田の三井

鉱山の遊休地三井グリーンランドや北海道、また東北の小岩井農場など、全国著名的な造園開発に引張り帆の多忙さであったが、後述しますが、先生は事の外、深い関心を持って居られたようで、我が意を得たりとばかりに実現について強く支持された。しかし直ちに本格的な設計監修の暇はなく、いづれは、やるとの確約を頼つて、当面は仮設の庭で実施する方針にして、正式に天満宮の西高辻宮司（現名誉宮司）、小鳥居権宮司さんに、行事として大筋の承認をいただきました。さあ、これからが諭吉さんの出番で、具体的な実施要領については、天満宮の吉嗣康雄、大広の岡部定一朗さん等が加つて推進し、特に諭吉さんの呼びかけで、祝部至善、松尾芳青さん等、福岡風俗文化研究会、福岡美容師会の協賛動員となり、昭和三十八年梅花咲き匂う佳き日に第一回開催となつた。その参宴に当つては諭吉さん一家総動員で、美沙緒夫人は短歌朗詠に、御子息三人さんは警固の衛士と云つた具合であった。勿論、曲水の盆には、県産三大清酒の万代、花の露、富の寿が注がれ、スponサーとなつていただいた。かくして毎年三月盛大に続けられ、遂には天満宮神事提案を受け入れられ実行の決意をされた天満宮の宮司さんを初め、神職の方々の徹底した御指導努力のお陰げと改めて敬意を表し、感謝の気持ちで一杯です。それに付け加えて置きたいこ

とは、その後の加藤先生です。やがて教授に昇進され、機の熟するのを待つて、お約束の本格的な「曲水の庭」造園について心良くお引受けいただき、昭和三十八年第一期工事が完成して今日に至っています。完成に当つて天満宮から教授の設計監修に対する謝礼の話が出ましたが、加藤教授はガンとして受けられず、そんな気持ちでやつたのではないと固辞されていましたが、たつてのお話しで、私に相談がありましたので、一応お受けいただき、その場で私が立合つて、御初穂料としてそつくり献上された逸話は、恐らく一般には御存知ないことと思われます。このように功績のあつた加藤教授は、昭和五十五年十月十六日、忽然として、満六十才になられた直後、亡くなられてしましました。然かも、十日後の二十六日には、加藤教授が地元世話人として開かれる、九州大学での日本造園学会で「曲水の庭」に関する論文発表を予定されていたのに、遂に未発表となつてしましましたことは、誠に残念でなりませんが、恐らく加藤教授のお人柄から、今頃は泉下でケロリとされて、諭吉さんと曲水の思い出話しなどをされながら、一杯汲み交わされていることでしょう。

その二 博多山笠

諭吉さんは、博多山笠でも色々とお手伝いされていたので、今度は私の提案でした。七月一日から十五日の間、建つてある「飾り山笠」もフィナーレの「追い山笠」も共に、古い伝統を



櫛田神社奉納山笠、爾后20余年 オールシーズン博多を飾る。

大切に守る、博多祇園山笠振興会を中心に運営されて、博多っ子が誇る櫛田神社のお祭り行事の一環であるが、そのしきたりは、先輩から後輩に引き継がれ、守り続けられねばならぬことは、百も承知の上ですが……と前置きのあと。先づ圧巻の「追い山笠」見物に、遠来の方は勿論、博多の人さえも、交通事情や見物場所などの問題で、仲々見られないとの話しう耳にすることが多く、かねがね、はくせん社長下澤轍さん等と、もつと視野の広い通りで見られるようにならぬものか。要するにパレード方式では、と云うのが第一案。次に、これまた大変な提案であるが「飾り山笠」を、博多総鎮守の櫛田神社境内に常設して、同神社の知名度を高め、広くは博多への観光誘致を計つては、との第二案であった。諭吉さん曰く「伝統のやかましか山笠ですけん、仲々難しゅうござつしようや。そればつてん一石二鳥で、みんなが喜んでもらえることですけん、云うて見まつしょう。」と、正式に振興会に提議されたが、案の上「けんもほろろですばい」で第一回目の返事が返ってきた。然し、大衆が求めているもの、喜んでくれることで、大局において伝統の精神を逸脱していかなければ、少々抵抗の壁があつても、将来必ず判つて貰えるものだと、あきらめずにさらに推進の手を進めているうちに、遂に当時の井上吉左衛門振興会長さん初め幹部役員の大局的判断で、実現に動き出し、相当な紆餘曲折もあつたが、当初は常設「飾り山笠」は現在の手洗い場の横に、博多

人形師、小島与一翁、川崎虎雄さんの手によつて建立され、一方パレード方式の山笠は、「集団山笠見せ」と名付けられて、昭和三十七年第一回目を昭和通り日通前を起点として、博多の知名士や振興会、各流れの長老が台上りされて、大道を一直線に走り、那珂川を初めて渡つて、福岡中央郵便局前に各流れが勢い水をかぶりながら、それぞれゴールしていった。感激にひとりながら諭吉さんとしつかり手を握り合つたのも、つい先頃のように思われてなりません。

諭吉さんの十七回忌をお迎えするに当たつて、前述の「それなら、うちにきませんか……」の私とな縁がなかつたならば、この二つの行事の提案部分は、生まれてはいなかつたであろうと、ひそかに思つていました。人は來り人は去つて行つても、共にたづさわつた企画が、大衆に喜ばれて、盛大に生き続け、後世に残つて行くことは、その人のみが味える此の上ない喜びではありますまい。諭吉さんの十七回忌の機会に、裏話として、初めて書き留めさせていただくことは、私の望外の喜びで、泉下の諭吉さんも、加藤退介さんも、さぞかし喜んでくれることと思いまして、敢えて筆を執りました次第です。お二方の靈に改めて感謝し、御冥福を祈りつつ。

合掌

「田中さんのオイシャン

田中氏と和楽路会

西海道和楽路会幹事 阿部 浩之助

私の長男はイラスト屋さんです。東京でセッセと絵を描いています。好きな絵でどうにか飯が喰える様になつたのも、幼児期、田中さんの上手な扇動のお陰だと思います。

それは未だ三、四才の頃でした。「桃太郎と鬼さん達」「ドラ犬」「田中さんのオイシャン」の三部作?が認められたのです。画用紙からはみ出すように描いた絵を

『こらアー、ヨーデケトー。この線は大したモン。隆ちゃんナ天才バイ』と、激賞されて以来、田中さん来宅の度び毎に、小さな手で、コップ一杯のお酒を大事に捧げ

『はい。オイシャンのオチャケ』と、ニコニコし乍らホトメキ、自作画批評をせがんで、田中さんをホトホト困惑させる次第でした。それが今、花開いたのです。

田中さんの才能開発力? 賞め上手の成果だと思います。亦、幼児にも共感を呼び起こす天衣無縫の精神であり人徳のたまものだったのかもしれません。



住いは野間でも博多ツ子
法被姿はおてのもの
ハチ巻キリリともうケガ
(怪我) 無い

田中さんはお酒を愛し、人生を愛し、泉の様に湧き出すアイデアで周囲に喜びを与えられました。博多仁〇加的風刺精神。私は版下屋ですタイ、と言うちよつとはにかんだ庶民性。自らの企画行為の結果に陶然とされる姿。お酒を楽しみ、人生を樂しみ、まさに典型的博多ッ子のオイシャンでした。

田中さんは広告営業マンと言うよりもアイデアマンです。利害を超えた行為の楽しみが目的でした。宗像神社を交通のお神様にされたアイデア。太宰府天満宮の曲水の宴催行。更に新町建設とP.R。光頭会銀髪会結成。等々、成功の例は枚挙に暇がありません。大勢の人達の喜びが田中さんの喜びでした。

『今度の興行はヨーデケました。成功しましたバイ。ハツハツハーン』と、お神酒でほんのり色づいた笑顔は、田中さんの桃源境だったと思います。

本当に田中さんは、単なる広告屋さんではありません、理念も高く、心の美しいアイデア屋さんでした。この事は、田中さんと和楽路会の出会いが端的に物語ります。

孫文盟友の末永節先生のファンで築かれた末永会と、巨人頭山満先生を主流に出発した和楽路会の戦後に於ける再開の仕事は、全くお金に無関係の労役でしたが、巨大な国際級ロマンチスト末永節先生との邂逅によつて、田中さん晩年の心のオアシスを、美しい緑影で、鮮やかに飾つた事だと思います。

——田中さんと西海路和楽路会——



宮崎神宮参詣



於 磯庭園



南洲神社參詣

昭和三十一年、末永節先生米寿記念祝賀会を、石橋源一郎氏

を中心にして計画されました。その時、博多の人材発掘家？嶋井安之助氏が、田中さんは、企画・行動力共に抜群の適任者だと推薦されたのがきっかけでした。

東京の頭山泉先生を会長に、野田俊作先生、渡辺鉄工所の渡辺福雄氏を代表にして、松原伍藤先生、八百治の内田平助氏等の福博の末永党？に、進藤一馬先生や妹尾憲介市議、樋口喜走氏等の玄洋社グループが合体して、賑やかに、盛大な米寿祝賀会が催行されました。アイデアマン田中さんの面目躍如と言つたところです。

その祝賀会を契機に再開された西海道和楽路会で、田中さんは企画大臣として全力投球されました。猪野参り（博多に於けるお伊勢様の代参所）を皮切りに、春秋二回の開催は、常時百名を超す参加者で盛会を重ねました。田中さんの御苦勞はさぞかしであつた事と思います。正に熟年パワーの爆発でした。

（和楽路会とは、昭和十年、東京の呉服屋さん達が、洋服時代の到来に対処する為、何か良いPRの智恵はないでしょうか。と、末永先生に相談を持ちかけたのがきっかけで、国際的アイデアマン？末永先生の発案で、頭山満先生を会長に担ぎ、敬神崇祖、心身鍛錬を標榜し、江戸時代道中着姿で、お江戸日本橋から、隊列をなして、お伊勢参りに出発したのが始まりです。翌年、博多に於いても、石橋源一郎氏を中心に企画・結成して

猪野神社に参詣したもののです

田中さんの追憶では、あれも書きたい、これも識つて欲しいと、懐かしく楽しい情景ばかりが多く、限りがありません。

御夫妻仲良く同行された和楽路会で、八百萬の神々に柏手され、仏陀、菩薩、羅漢に合掌される時、敬虔な祈りの姿の中に、ちょっとびり乍ら顔を出す博多ッ子的面はゆきが窺がえて、良いゴリヨンサンの内助に支えられた、ロマンチスト庶民の心情が感じられました。

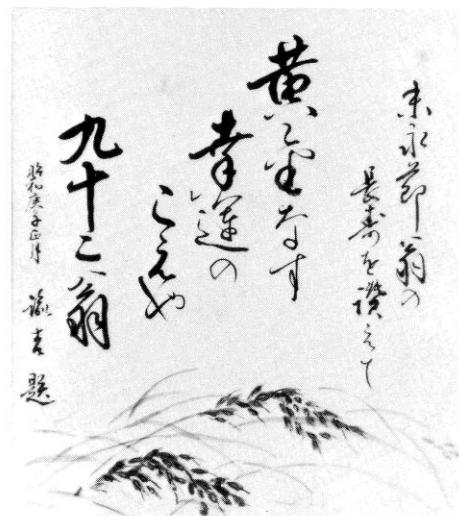
田中さんは、楽しい智恵と、明るい躍動で、多くの人達に喜びを与えられました。今頃、冥土は、さぞかし賑やかな事でしょう。



太宰府天満宮参詣
三愛ホテル社長 窪広太氏と



笛崎八幡宮放生会参詣



未永節先生讚歌



宮地嶽神社参詣



秋月探訪



赤間神宮参詣

輓
詩

辰山松原伍藤作

噫、君、畢生、徹二純真一

易簣茲迎三忌辰

執レ筆縱横、揮灑妙

開レ唇卒爾頓才新

忘レ私偏盡奉レ公意

捨レ利唯擊益レ世身

老少今生奈レ無レ定

江湖誰克比二斯人一

噫君畢生純真に徹し

易簣茲に迎ふ三忌辰

筆を執れば縱横、揮灑の妙アリ

唇を開けば卒爾頓才新たなり

私を忘れて偏に盡す公に奉ずるの意

利を捨てて唯だ擊ぐ世を益するの身

老少今生定めなきを奈にせん

江湖誰か克く斯の人にはせん

筑前琵琶
新曲

田中諭吉翁追憶

佐々木 滋 寛 作

見わたせば

荒津の櫻 千代の松

朝日の映ゆる博多の津は
千歳に餘る繁華の府

こゝに文化を支えし人

田中諭吉翁の名ぞ思ほゆ

博多にわかや筑前琵琶
行事芸能を奨励し

郷里に盡されし数々は

広く世間に讃えらる

あゝ君逝き給い早や三歳
温容いまは見えざれど

残し給える業績は

筑紫の里の精華として

永く郷土に輝やかん

永く郷土に仰がれん

古きを温ね今を知り
遠くは平安朝のみやび事

曲水の宴を復興し

近くは都心新天町を

博多の花道として開き

光頭会



神妙に修祓を受けて…。



頭光下の盟

光頭会



光頭は世界を照らす ムケー文化。



銀髪会と友愛の握手
羨望は何れにありや

「奇徳の人

諭吉さんの思い出

株式会社新天町商店街公社社長
博多仁和加振興会会长

下澤 輓

太宰府天満宮曲水の宴 等々
櫛田祇園集団山見せ
数え切れぬ実績を残しておられます、特に光雲神社社殿の再建は新天町設立と共に諭吉さんの大きな遺産と申してもよいと思ひます。

かみの薄い温和な顔、口を開けば、そのまま博多仁和加になります、足早やに歩く諭吉さんが目に浮かびます

亡くなられて早や十七回忌を迎える由、今更らに月日のたつ早やさを感じますが、あの昭和四十五年は人形の與一さんが六月、諭吉さんが九月と博多の大事なお二人を亡くした年でした。戦災で灰燼になつた博多の街の復興に逸早く西日本新聞社に戦後対策本部が設けられ、その主要な一員として今日の新天町商店街設立の基礎を作つた諭吉さん、奇智に富む素晴らしいアイデア、戦後物心ともに失くした市民に笑いと楽しみを與え、喜ろこばせた諭吉さんはどこに居ても次ぎから次ぎと立案、企画、実行に移されています。

この業績は、諭吉さんの知恵と情熱と実行力の賜ですが、それに加えて適確な人を知る能力を具えていた事です。それは新天町創立に原田平五郎さんを光雲神社再建に吉次鹿藏さんを引出して成功された事でも理解が出来ます。

また書画をよくし、中でも勘亭流の筆は博多隋一で頼のまるれば即座に書いていた人なつこい口八丁、手八丁の人でした。逝かれて十七回忌、生粧の博多つ児の諭吉さんは與一さんや三太郎さんたちと盡きぬ話に楽しい冥土の毎日だらうとその徳を偲んで居ります。

合掌

白髪会
禿頭会
博多仁和加振興会

櫛田神社境内飾り山笠



「田中諭吉さん」

郷土史家 井上精三

協力してくださいました。この会はいまもつづいています。今年も盆にわかが、おこなわれます。これも諭吉さんが、会の基礎をしつかりと、固めてくださったおかげです。

亡き田中諭吉さんには、たいへんお世話になりました。おつたしは新天町屋外ステージを利用させてもらつたに過ぎませんでしたが、終戦直後、西日本新聞社戦後対策本部員だった諭吉さんは、新天町建設のために東奔西走されたのです。諭吉さんは新天町建設の功労者のおひとりです。

小説や芝居にと全国的に名が知られているのに、博多柳町の記録がないのを残念と、研究をはじめたとき、諭吉さんのお宅に、柳町に関する古文書があると聞き、見せていただいてびっくりしました。

それは諭吉さんの祖父の田中甚平さんが、嘉永四年に柳町の大和屋の主人に四百四十三両を貸したときの借用書でした。それに、若し返済できないときには、家屋敷とともに抱え女郎十人も、差し上げます、とあるのです。女性を借金の低当とした女性蔑視と、人権無視の貴重な古文書であり、もちろん博多風俗史・遊里編に記述のお許しをいただきました。

にわか今昔談義という本を出版した記念に博多にわか振興会をつくりました。この会の結成と運営に、諭吉さんが積極的に

諭吉さんのアイディアと文化活動に、博多のものは大きな恩恵に浴しています。福博の知名士が楽しみにしていた光頭会や、わらじ会の企画、運営も諭吉さんだと聞いています。

もつとも注目すべきは、曲水の宴の企画です。「太宰府で平安

朝時代の曲水の宴を再現したらどうでしようか」と、聞かされたとき、その意表に出たすばらしいアイディアにおどろいたものです。

いまや曲水の宴は、太宰府神社の年中行事となり、大阪でもこれに真似て、おこなわれていると聞きます。

そのほか、福岡の文化につくされた諭吉さんの企画は多く、昭和期の最大のアイディアマンであり、その功労に対しても、博多のものは忘れてならない方だと思います。



元ライオンズのホープ中西太選手と…。
今は囁んどくー（監督）

「田中さんと仁和加振興会」

博多仁和加振興会常任理事 西 島 荒太郎

私と田中諭吉先生とのそもそもその出合いは約二十年ぐらい前のことになりますが今でも続いておりますサツボロビール（星の会）の例会に私がゲスト出演を頼まれた時でした。会員の中には博多人形の小島与一先生、彫刻家の安永良徳先生、舞踊の花柳金太郎先生、其他そうそうたる博多の知名士ばかりで特にこの三人は奥様同伴で加入されていました。私が宴席で披露する我流踊りと博多にわかを何所でみられたのか知りませんがお招きをいただき、当時橋幸夫のデビュー曲「潮来笠」のレコードに合わせて踊つたことを覚えてています。それがきっかけで星の会会員の入会を果たしたわけでございます。先生のお嬢さんが女子大を出られ中洲のサッポロビールの会社の近くで洋裁店をしておられた頃よく案内されて行きました。博多仁和加振興会は昭和三十二年六月初代会長（福岡市長）奥村茂敏氏発足以來今日まで郷土が誇る伝統芸能を時の政治や社会を風刺し博多仁和加を正しく振興させるため、仁和加の保存育成に私も微力

ながらつとめてまいりましたが、其の頃の田中先生は殆ど一人で走り回つておられました。事務局がまだ西中洲の会議所内の

観光協会時代のことと振興会主催の盆にわか大会、年忘れ会の行事運営上の経費の捻出、一度は会場問題で困り果て南公園の動物園内で開催された時など東雲堂（二〇加煎餅）前高木社長さんと御二人でよく面倒を見られ活躍されていたことが頭に浮かんできます。又、先生は漫画家協会にも加入され持ち前の達筆家で御協賛をいただいた寄附者名の書き出しの特に楷書文字が天下一品でした。西広勤務の傍ら誰も気付かぬ発想の博多のアイディアマンで私の知つていてる限りでは二月三日節分祭行事の際、櫛田神社での表門に日本一の「お多福のくぐり面」ちょうど其頃に開催される太宰府天満宮の平安朝時代の歌会を再現された「曲水の宴」も田中先生のアイデアであり、年毎にどちらも盛大になり博多福岡の最大の名物行事で発展致しております。今度始めてお聞きして驚いたことでございますが、御子息四人全員国立大学の九大御卒業とかで恐らく全国でも希なことではないでしょうか。本人の努力もございますが御両親の御苦労は勿論のこと皆様の頭の良さが偲ばれます。

ここで私の博多一口にわかを一題

「先生の頭はツルツルのピカピカじゃったが今日の仁和加振興会の発展の陰にや先生の光り輝やく功績ば忘れちやつまらんば

い。我々後輩は博多にわか振興の為い極楽浄土から『禿』（励）
まさるとる」



誰のが誰れやら
ヨート判リマッشن バッテン
田中さんナア
スグ面の割れますバイ。

「田中さんの思い出」

一さん（いすれも故人）ら博多のそうそうたる方々に紹介していただいた。

博多仁和加振興会常任理事 糸岐 ぼんち

私が今日博多にわか界で活動できるようになったのも田中諭吉さんの引き立てによるものと感謝している。私が博多仁和加振興会へ入会したのも田中さんに勧められてのことである。昭和三十八年の初夏、拙宅に来られて「あなた（糸岐）の活躍は新聞で拝見しますが、一つその熱意を仁和加振興会の方で発揮してもらえめえか」ということだった。

その年忘れ会の一月前に、私が主宰する「にわか鉄道」と熊本市の肥後狂句「銀杏会」の縁結び記念他流試合を福岡市西新の旅館で行つたが、田中さんに審判長を引き受けているのはこれだけである。

当時、田中さんといえば博多にわかの権威であるとともに江戸時代の風俗研究家であり、またそれらの資料のコレクターとしても高名な方である。そのご本人が直々に箱崎の小薬店にお見えになつたことは、一にわかグループの主宰者としてまことに恐懼感激の極みであつた。しかし話してみると、気取らず飾らず、ざつくばらん^{ぢょく}として「この人があの有名な田中諭吉さんかいな」と安心したり、感心したりした次第である。

もちろん喜んで入会させていただき、その年八月の振興会総会（中洲南新地一仲柳）で田中さんから吉次鹿藏さん、小島與

田中さんには西日本スポーツ紙のレッド乾杯シリーズにも出していただいた。サントリーの広告で、一ページ全部で「にわか鉄道」と「福岡大学落研」の会員約三十人による東公園十日惠比須神社境内に於けるシャレ合戦を採り上げたものである。（十四年六月十六日付）もちろん田中さんも紙面の半分以上を占める写真の中央でにこやかに写つておられる。



博士の卵も仁〇加バ
テッドー（手伝う）とるウ。

田中さんはテレビでも一緒に、または同じ番組内で出演したことがあるが、忘れられないのは三十九年五月二十五日にNHK総合で全国放送された「新日本紀行―博多」である。博多どんたくを紹介したものであるが田中さんは光頭会の世話役として、私は九大の留学生にわかの主宰者として映っている。

そのテレビでの田中さんのお顔はまるで御日様がにこにこと笑ったように柔軟そのものだつた。おその「新日本紀行―博多」はその後三回再放送されて、見られた方も多かつたようである。

私が西日本新聞の寸言博多にわか欄の講師を引き受けたのが四十二年四月で、三年経つた四十五年七月二十日にボツ葉書を燃やしての「寸言没供養会」を松源寺で行つたことがある。松源寺は郷土史家の佐々木滋寛さん（故人）が住職をしておられたので私が協力のお願いに行き“格安”的お布施でお経を上げてもらつた次第である。そのときも田中さんに来賓として来ていただき、「ボツ葉書でハイ（灰）クラスの作品よ安らかに…」とご自身作による弔辞を読んでいただいたが、考えてみると、これが「仁和加入士田中諭吉」の最後の出番ではなかつたろうか。当時、田中さんは病魔に冒されて入院しておられたが、私の頼みで病軀を押して奥さんの介添えで来られたのである。しかしその姿は痛々しく、私としてはなんともすまない気持ちだつた。

田中さんなればこそ私のために来ていただいたと思えば今も胸にジーンとくるものがある。

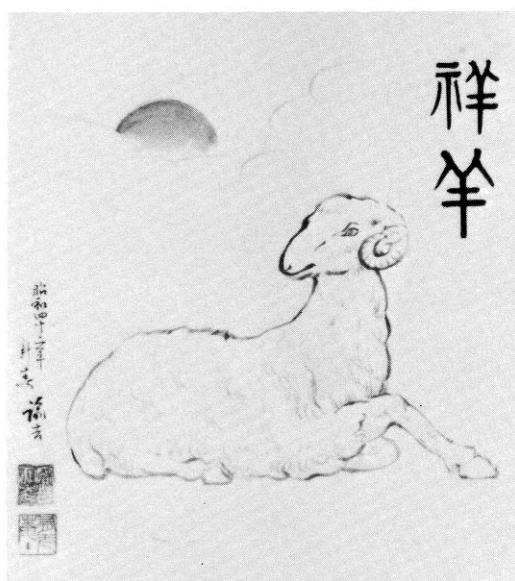
四十五年九月五日—博多にわかの大先輩、田中さんもついに不帰の客となられた。九月九日に積善社で行われた盛大な葬儀では九州漫画同人の追悼漫画の中に私のわかも入れていただいた。

「今日、祭壇に飾られて、田中さんなどげん思いござろうかね」

「きまつとるくさ。」これが斎場（最上）の特等（禿頭）席たいい」と言いござる」

私が田中さんを尊敬する気持ちは変らない。今でも田中諭吉さんのそばに付いとう（追悼）。

○本名—糸岐保雄。博多仁和加振興会常理事。にわか鉄道主宰。



プロフィール・TANAKA



プロフィール・TANAKA



人生は楽しいハンメンを強調しよう。



成果満点 威風堂々



カツコ良く何時も名司会。

プロフィール・TANAKA



吾れに成算あり
経過好調 少々得意



妻は何処に？



菅笠に手甲脚絆、足元草鞋で心も軽く…。

たくさんやつた九漫の催しもので

なんてつたって甲中諭吉さんのアイデアが多かった

からだからほどほほしるアモアで『花の下試胆会』だろ

ゆ吉さんと安永良徳さんの

きよう会総会でのプロレスごっこが

ちよっぴりヒントで『バラエティーショー』もつたし

さん然と輝く功績は特等(禿頭)賞もんだ

九州漫画家協会会長
ばんは三郎



「思い出」

九州漫画家協会名誉会長 松見勝海

芸者と言える。

春秋二回我ら九マンの例会が催される、会議といつても、重くるしいものではなく、続く宴会の前哨のようなもので終始和氣藹々、宴に入つても誰の司会ともなく田中先生のベースに巻きこまれ爆笑々々、先生の演芸は芝居、歌舞伎は勿論、詩吟、剣舞、能狂言さては大政官布告まで完全に茶化し、余興に盛りこみ、拍手喝采、まさに博多の中の博多もんであつた。

田中諭吉先生十七回忌とは歳月の流れの早さに今さら驚くばかり、先生は我々「九州漫画家協会」にとつて頼りになる親爺さんであつた。先生とは一刀研二先輩に私ぐらいが年齢的に大差なく、明治、大正の話になつても楽に話が通じ合い愉快であった。先生は文字通りの万能選手で、本職の広告業はもとより世事万般に通じ、そのアイディアは泉の湧くが如く無盡蔵で、話題の豊富なこともまさに生きた百科辞典であつた。

先生の光頭も忘れられない、普通ヤカン頭といつても後頭部や耳のあたりに未練たらしくウブ毛をのばしているものだが先生のは全く違う、一本の毛も毛根だにはドクターも驚嘆したと自慢のタネでもあつた。それを日常處世の上に最高に活用された。一度この光頭を前面にうち出し名のりを上げたら、相手は永久に忘れるはないだろう。しかもなぜか愛着を感じる、普通なら少なからず気遅れするところだが、先生はこれを逆手に有力な武器として活用されたことはひとかどの武

私が今も残念に思うのは先生の歌舞伎文字即ち勘亭流の技のみごとさに気付かなかつたことである。実は私も中学時代から勘亭流に興味を覚え、当時金五円也で「竹^{たけ}柴^{しば}鴻作^{こうさく}の勘亭流」の手本を買って練習に励んだ一時期があつた。しかし田舎ではどう頑張つても奥義?を極めるまでにはいかない、先生晩年のころふとしたことで「名士劇のポスター」のみごとな勘亭流が田中先生の作と聞いて驚いた。なぜもつと早く先生から手ほどきを受けなかつたか悔んでもあとの祭り、おそらく九州ではただ一人の書き手だったと思う、にせて書く者は看板屋でも大ぜいいた。先生ほど完璧に勘亭流を会得した人は九州には先生の外にいない、しかも最後まで「あれはおれが書いたのだ」ということは一度もおつしやらなかつた。そこがまたキザなことばだが「にくい」ところであった。「今さらかえらぬ事ながら」から「もう一度顔を」と三味線の音が聞こえるようである。どうやら先生の芝居話の感化が十七年経つても残つているようだ

ある。南無頓証菩提。



松見勝海 作



松見勝海 作

「諭吉の種」

九州漫画家協会副会長 松岡茂

令息四人は秀才でいざれも一発で九大に入学された。奥さんの教育がよかつたのですねと賞めると、

「いや、僕の種がいいんだ」と豪語した。四十五年九月五日、六十九才で逝去。せめて一万円札が発行される時まで生きておれば、諭吉の札が出来たと大喜びすることであつただろうと思うことしきりである。

(敬称略ご容赦)

当世の頓智奇才と称えられ、ご当人は稚氣漫々、人を喜ばす為にはさまざまな企画を推進されたことは、今でも吾々の心の中に潤み込んでいる。

その数多ある中で、太宰府の「曲水の宴」が今もつて継続されているのは圧巻である。一刀研二は歌人であるので要請されて出演した。それでは私も、川柳をやるからと売り込んだが、川柳と博多二〇加はご免と一笑に附された。

その替りに、新天町の「釜まつり」には九漫会員総出演で、一刀研二の閻魔大王、諭吉の和尚は適役であった。末田の幽靈は本物の鬘を借りてくる凝りようで、反対にその他大勢は裸に禪だけの赤鬼青鬼であった。

「花の下試胆会」では桜の下で白衣の医者と数名の看護婦が尿瓶でビールを呑み、オマルの卵、痰壺の生かきを食べる。安永良徳の名医ぶり、小島与一の患者。このご兩人も今はいない。その日の夕刊に一頁写真で報道された。



「安永さんとのプロレス試合」

九州漫画家協会会員 草 場 しげる

アイデアマンの田中さんが異郷に旅立たれてからもう十七年、月日の流れは早いものですね。

田中さんの発案でやった協会の行事は数限りなく、その中でも奇抜だったのは、西公園の桜の木の下でやった第二回花の下試胆会（第一回は志賀島で開催）。この行事は写真グラフに掲載され、福岡に九州漫画家協会あり、とその名を全国に轟かした？催しでした。それは看護婦姿のホステスさんのサービスでつまみに、シビンに入ったビールを飲もうという企画ものでした。こればかりは食欲はゼロだった記憶がします。

総会後の宴会での余興にも、会員それぞれに想い出があると思います。私に対しても強烈な想い出となつて残っているのは、当時からの会員なら抱腹絶倒した一夜のプロレス試合がNo.1でしょう。



田中さんをはじめ安永さん、一刀さんに原さんと他にも協会員が何人か旅立つて、あちらの世界も協会員がふえて、田中さんの音頭でにぎやかにやつてているのじやないでしょうか。期総会後の宴会の席でこの余興が飛び出したのです。アンコ型だつた田中さん、筋肉質の故安永良徳さんのお二人がパンツ一枚になつた。どういうきっかけでそうなつたか思い出されましたが、当時は力道山全盛時代だった頃のこと、テレビでの見よう見まねのレスリングが始ました。宴会場は拍手とワーアーの大歓声のウズです。これに旅館のお手伝いのお姉さんたちもノセられて、女子プロレスも参加した楽しい夜を過ごしましたが、今でもテレビでプロレスの場面を見るたびにお二人の姿が瞼に浮かんできます。

頭輝ウン十年市民を照らす
太宰府天満宮曲水の宴にて安永良徳氏と…。

二十六年前の昭和三十五年十一月志賀島の旅館“松屋”で秋

「まぼろしの黒田藩宝物殿」

九州漫画家協会会員　末　田　時　夫

前置きが長くなつたが、田中さんのエピソードは書き尽せないほどあり、先輩方がいろいろ述べられると思うので、私は田中さんが『やり残されたこと』を一つ紹介したい。

「こんど黒田の宝物殿ば造ろうと思ひりますケン、お宅にナンカありまっせんナ」と言われた。

「家には鎧やら、刀やらあります。火薬ば調合しよつた石臼もありますバッテン、なんちうても面白かとは大砲でつしよう」と言つて、この大砲のことを話すと、

「そらあ、ぜひ出してつかあさい」といつてメモされた。その後お会いしたとき

「いろいろ集まりりますバイ、これを見てがっしゃい」といつてメモ帳をパラパラめくられた。その時のメガネの奥の白いまづげが今も忘れられない。

私自身も、黒田の砲術は陽流だけでなく、智徹流もあることを世間に知つてもらいたかつたし、火薬の調合も分かつてゐるので、出来ることなら弾丸を複製して一発ぶつ放したい（もちろんその筋の許可を取つて）気持、今も変わりない。

それでも田中さんが亡くなられたので、この宝物殿造りの話もそれきりになつた。

むかし海軍記念日というのがあつた。その日は箱崎の浜で数人のオイサンたちが横一列に並んで、大きな火縄銃をドドーンと撃つていた。黒田藩の『陽流抱え大筒』というやつで、戦後もときおり新聞テレビで紹介されることがある。

ところで私の家にも黒田藩時代の、砲身の長さが三十三センチ、直径八センチのミニ大砲が一門転がつていて、ズシリと重いその鉄の塊をオモシに使つている。またこのミニ大砲の取り扱い方をしるした『智徹流砲術免許皆伝』なる巻き物もあるが、いずれも私のご先祖の遺品だ。この大砲のタマは巻物の絵図によると、先端が鋭い鉄製弾丸で、これに約三十三センチの木製の筒が接続。筒には火薬が詰まつてゐる。これを砲口から差し込んで撃つと筒の中の火薬に引火、火を吹きながら飛び、城門や家屋に突き刺さり火災を起こすという仕組み。木の筒には三枚の羽根も付いていて正確に飛ぶそうだ。いうならば現状のロケット砲の原型とでもいうもの。

「田中さん」

九州漫画家協会会員 内田俊治

真っ先に思い出すのはまん丸いお顔で福徳圓満を絵に描いた
ようなお人柄。一糸(?)纏わぬ磨きのかかつたオツムが一層
お顔の丸さを強調したのかも知れません。

自ら禿頭会総裁を任じられた田中さんでも幾許の郷愁があるの
落穂拾いの名演技になつたのでしょうか。

田中さんは大変な物知りでそれに芸達者が加わつて能狂言と
なり博多仁輪加となり田中さん独特のユーモアの裏付けで悪ふ
ざけになり勝ちな所作も見事な名演技になるのです。

田中さんの想出は余りにも多くて何から書いたらいいのか迷
いますが多才多能の中にアイディアマンの一面もあつて意表を
つく構想に驚かされ又それをマスコミに乗せて広く報道する事
も忘れない周到さに頭が下りました。

田中さん、私共の九州漫画家協会も来年で満四十周年になります。嘗ての青壯年も白髪の老年と相成りました。田中さん御存知の顔ぶれにも多少の変化は出来ましたが仲良くやって居り

ます。見守つていて下さい。









笛崎宮献燈図



菅崎宮献燈図



笛崎宮献燈図



お観音様



ダルマ・おひな様



「父と私」

長男 田中穰治

向かう足を鈍らせた。偶々出張等で家に立ち寄った時、技術屋の私と父の間では共通の話題は仲々見出せなかつたが、世間話の中に両者の年代の差がだんだん縮まつて行く事が感ぜられた。然し、一種の照れの様な物が有つたのかもしれない、互いに話しに深入りする事は避けていたが、父が私を一人前の男として扱つてくれているのは良く分かつていた。

父と私とは性格的には余り似ていないとと思う、然し、自分自身ほんと意識していないのだが考え方や物事に対する反応の仕方について著しい共通点がある事を他人に指摘されて驚く事がある。父を特徴づける「知的探究心」「卓抜なアイデア」「巧まさるユーモア」どれ一つ採つても私の及ぶ所でないが、其の資質の一部は確実に受次いでいる様である。

十代の後半二年間を海軍で過ごした私には、敗戦による総べての価値観の変貌と、復員後入学した大学で吹き荒れていた左翼的風潮に反発しながらも心情的には体制否定の方へ傾斜していくつた。学生運動を行なう迄の踏ん切りはつかなかつたが、批判の目を政治や社会や自分の通っている大学ばかりでなく、言論界に属すると言うだけで其の矛先は父にも向けられた。今にして思えば甚だ稚拙な論理で頭の中は一杯となり、父自身の考えを理解するだけの受容性に乏しく、私に対するアドバイスも若者に有り勝ちな猾介さで、素直に受け入れる事が出来ず何かしらうとましい物に感じていた。

父には左程の相談もせずに職業を選び、卒業と同時に郷里を離れた。私の決断に父は何も言わなかつたが、心の中で自己中心の不肖の子の巣立ちに惜別を感じていたに違いない。

社会的経験を重ねるに従つて、青年時代に周囲に及ぼしたであらう自分の未熟な言論や行動が、恥ずかしく何かしら郷里に

十数年前になるが、私の勤めている会社が、社長の政界進出と共に経営危機に見舞はれ、其の累は社員一人一人の身の上にまで及んだ時、ふと父の事が思い出された。昭和初期の金解禁に伴う金融恐慌で、其れ迄順調に進めて来た図案社を廃業せねばならなかつた経緯、多数の家族を抱え乍ら戦後の混乱を持ち前のユーモアとアイデアで切り抜けたバイタリティ、此の様な時こそ父の助言が欲しかつたが既に亡くなつていた。

息子もやつと大学を卒業し社会人として働いている。私も当時の父と同じ年代になつた。息子と私の関係を、私と父の関係にダブルせて始めて父の気持ちが分かつて来た様な気がする。

「義父の忌を前に」

「我が家家の宝物」

長男の嫁 田 中 節 子

長女 山 下 真理恵

嫁ぎ来し吾れにやさしき父なりしに年ふる母と離れ住みゐて

なせしわざ載せし黄ばみし新聞は守護神のごとわが書架にあり

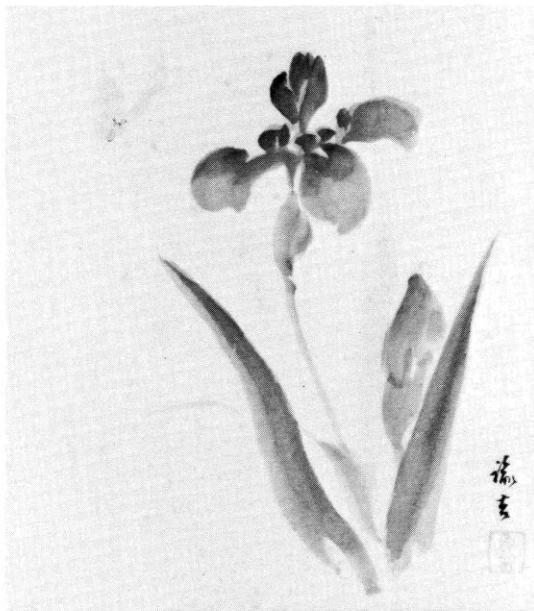
母と来て焼けつく墓石に水かければ十七才にて書きし字の顕つ

マンションとは名のみのまことに窮屈なコンクリートの小箱
の中で暮して居ます私にとつて、軸物を掛ける床の間や、置
物を飾る違い棚のある生活は夢の又夢。勿論そこに鎮座させる
べき高価な品等とはトント無縁の我が家に、ただ一つだけ燐然
たる光を放つてゐる額があるのです。

無毛威（無形）文化財として自他共に誇るべき父が、昭和四
十五年六月に死を直前にしながら、子供達の為に書き残してく
れた絶筆の如き額なのです。

それはまるで光り輝いていた父の頭の様にキラキラと我が家
を照し続けて居ます。

此の宝物の額の内容が、摩訶不思議なのでござります。父田
中諭吉は生前に果して、敬神崇祖の念ありやなしや？……と申
しますのは、あれ程神社仏閣に多勢の人々が集まられる事を無
上の喜びとし、何やかやと企画を立てさせて頂いてそれを実行
に移していくながら、父が神殿にうやうやしく額突く姿や、仏壇



に手を合わせてゐる様子等は全く想像すら出来ないのです。セ

カセカと小走りに歩く父はきっと社殿にお詣りせずに、社務所へ直行タイプであつたと存じます。

ややこしい世間の形式等は無視して、自分流で神様や仏様と

仲良くお付合いをさせて頂いていたのでしょうか。

その一見無神論者の様に見えていた父が、死と直面していた年に書いた般若心経の写経の額、それはそれは見事な筆跡なのです。

とてもその年の夏の終り此の世を去つて行く人のなせるわざとは思えぬ力強さと大きな響を与えてくれます。特に「無老死亦無老死盡」というあたりになると、その筆は冴えに、冴えて、まるで父は自分の病名を知りつくし、又来るべき死期を悟つていたのではなかろうか。という様な錯覚すらおこします。

没落した家の長男として生れた私の父は、子供の頃父親と死別し、早くから一家の柱として働いたため、希望する学校にも経済的理由で行けず全て独学であつたと聞かされています。然し生來のユーモラスな天性の持主であつた父からは、そんな暗い時代は感じられないのです。何時、どこで、書画を学んでいたのでしょうか。？まるで手品師の様に、サラサラと何の苦もなく字や画を超スピードで、書いていた父が不思議でなりません。

父が急ぎ足で旅立つて十七年が経過しました。私も結構な大

年増のおばさんになりました。

最近になつて漸く父が最後に書き残してくれた此の大きな般若心経の額の謎が少しづつ理解出来る様になつたのです。

きつと苦学した父は、何事にも、かたよらず、こだわらず、とらわれない人生を、理想としていたのでしょうか。

毎朝毎晩私は此の額と対面して居ます。

嬉しい日は共に喜び、つらい時には力を授けて、そして人生

の努力と誠実を無言で私に教えてくれる魔法の額が我が家にあります。



「大成功じやつた」

次男 田中耕基

一つのイベントが無事終ると必ずアルコールが入つてのご帰還ということになるが、母が「今日はどうだつた」と質問するのに対し、開口一番「今日はもう大成功じやつた」と答えるのが口癖であった。これに続いて、誰がどうしたこうしたと一日の模様を身振り手振りで喋りまくるといった具合である。私達は父の話が面白いので一緒に笑いながら夜のふけるのも忘れて多かつた。

今にして思えば知らず知らずのうちに人生勉強をさせられたような気がする。

父が他界して早や十七回忌となつた。

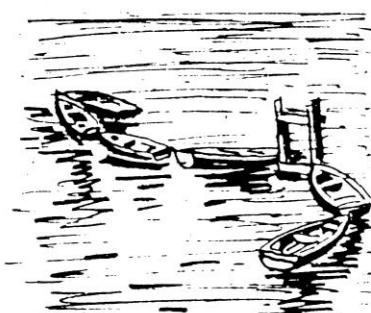
父の人生を総括してみると、まことに慌ただしく、ドラマチックで且つコミカルなものであつたと思う。

若しも靈界通信があつたら父はきっとこう言うだろう。「俺の人生は大成功じやつた」

父は大変忙しい人であつたようで、私が物心ついて以来一緒に夕餉のテーブルを囲んだ記憶は甚だ少い。殆んど夜十時過ぎの帰宅で日曜日も何処かへ出かけることが多かつた。新聞社や広告社の勤務が長かつたので職業柄不規則な時間の仕事をせねばならぬ面もあつたが、この他、個人的に色々な人から頼まれて催物の企画を立てたり絵や字を書いたり、司会をしたり忙がしく立廻つていたようである。特に晩年は光頭会や銀髪会、太宰府の曲水の宴、西公園の光雲神社の復興などに情熱を燃やし縦横に活躍したのが印象に残つている。

父の仕事のやり方をみると、最初の企画から最終の演出まで全部一人でシナリオを作り、実施に当つては、自分はあまり表面には立たずあくまでもアイデアマンとして蔭の黒子役に徹するような風であつた。

父の言によれば、自分が書いた筋書どおりにお偉方や大勢の人々が動くのを見ると実に愉快な気分になるそうである。



「みそつかすの弁」

二女 小桜 千穂実

かとじやなかト。学校の勉強が面白うなかだけタイ
なんという名言でしよう。

実際、私は学校の勉強ではありませんでした。数学の公式を覚えるより、漢字の書き取りをするより、シャダツな父が歌舞伎や狂言の所作を演じ、それを私は真似することの方が好きでした。「ちほみはマネがうまか。誰よりもウマか」という父の言葉にすぐ調子に乗る私でした。

台所を片付けていて、時々クックッと笑うことがあります。お椀の底に味噌汁のカスが残っていて、これが味噌つかす。父が薦めてくれた字引「広辞苑」によりますと、みそつかす＝味噌のかす。一人前の数の中にみなされない子供。みそつかす。みそつちよとあります。

なぜ台所でそんな思い出し笑いをするかといいますと、私は、まさにみそつかす、この説明の通り、田中家六人兄弟の中でのみそつかすがありました。

兄、姉、弟は誰を取り上げても秀才才媛学校の成績は抜群、はた目に見てなにひとつ欠点の探しようもない人達に混じって、この私はといえば、成績は誰に比べても月とスッポン。私とて多感な少女でありましたから、通信簿を貰うたびに落ち込みそうになつたことはしばしばでした。

そんな時、父諭吉が励ましてくれた言葉は「ちほみは頭が悪

新聞人であつた父は、私にとつて人生の教師であつたように思います。調子に乗りやすい私は、このトシになつてなお、父の言葉の励ましに乗り、時に誰やらを真似して踊り、時に誰やらをヤユして漫画を描きます。

それが時に母の眉をひそめさせ、このトシになつてなお、お

叱りの電話を頂戴いたします。

先日もあることで母から厳しい叱正を頂きました。
しおたれでいる私にどこからか父の声

「母刀自に叱られたか、ちほみ？」

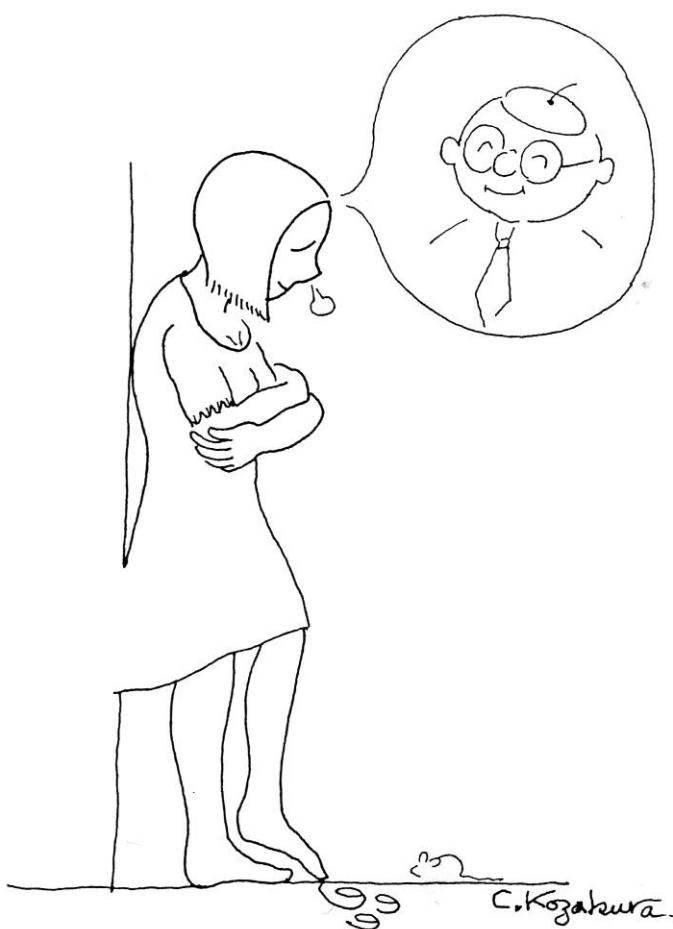
「刀自つてなアに、お父さん？」

「そげん時こそ字引ば引かんネ字引ば……ちほみ」

額が頭につながつて光る部分を撫でながら

「ふつふつ」と笑っている父のおもかげが、

ちらちら、ちらちら……



「私の名前」

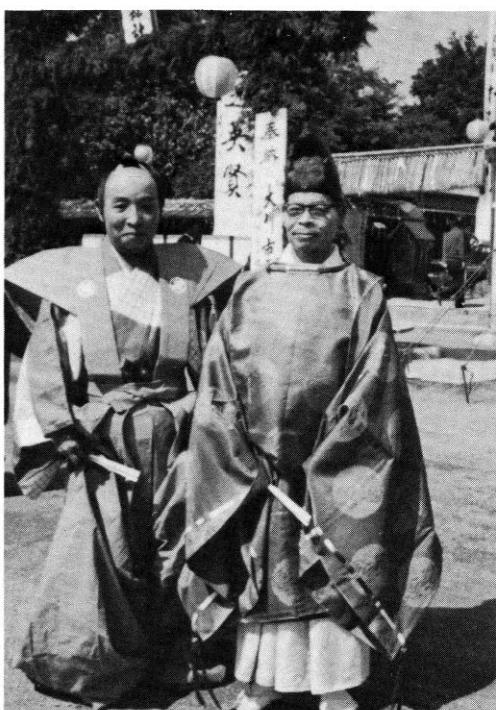
三男 田 中 卓 史

待に応えることができないのだけれど、父の与えてくれた名に何とか相応しくなるように頑張りたいと思っている。

父・諭吉は私達・子供にかなり凝った名前を付けたようである。上から順に並べると、穰治、真理恵、耕基、千穂実、卓史、崇和となつていて、今まで一度も、これらと同字の同名にお目にかかるない。自分が名付ける立場になつて、初めて気付いたのだけれど、田中はよくある姓なので、名の方だけは平凡にならぬようとに苦心することになる。

小学校のとき、一寸間違うと、私のあだ名はタクシーとなるところだったのが、そうはならずに出でたのである。最初のPTAで、父が「オーイ卓坊」と呼んだのがそもそもの始まりで、よほど卓坊の響きが良かつたらしく、今でも同窓の間では卓坊になつてゐる。オーイ卓坊の影響は大きく、も一人いた田中君も悠坊と呼ばれる破目になつた。

五番目に私が生れたのは、戦争の真最中の昭和十九年である。時代も影響してか、卓史の名は歴史上に卓越するように付けられたと聞いている。私には何とも荷の重い名前で、なかなか期



「博多にわか」

四男 田中崇和

ある時父が縁側に写真を並べて整理をしていた。その時家で飼っていた犬（名前がサブー）がやつて来て、その中の一枚をくわえて持つて行ってしまった。父が「おーい、サブーが写真ばくわえて持つて行きよるぞ、あげなもんば何で喰うとかいな。」と言った。私はその時すかさず「そら犬がくわえて行くくさ、だいたい写真のことやけん、いんがし（犬菓子、陰画紙）にきまつとる」と言つた。

「父は川端で母は中洲」となれば私には十分に「博多んもん」の資格はあるはずである。ところが残念な事には子供の頃には既に野間に移つており、もう一つの資格である所の山笠を昇いた事がない。

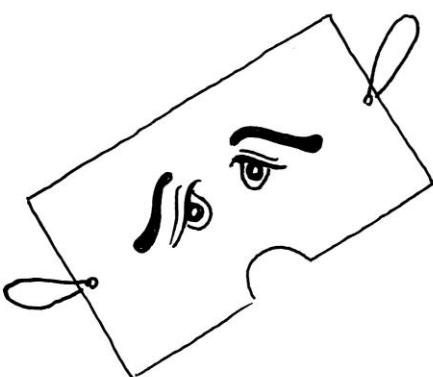
しかし私は親ゆづりの博多弁をもつて「博多んもん」の証しとしたい。

父は家に於ても「博多にわか」や「洒落」を良く言つていたものだつた。最後の入院のベッドの上で鼻からパイプを通されていたにも拘らず、胆汁まじりの胃液が口にこみあげて来ると、「また炭鉱住宅（炭住）のやつが来やがつた」などと死の直前までも洒落を言つていたぐらいだつた。

私も子供の頃から父の真似をして「にわか」を作ろうと試みていたが所詮、駄洒落の域を出るものではなかつた。

その様な訳で私の作ったものはすべて父の評価に値する物ではなかつたが、唯一つだけ父から誉められた物がある。

私は博多弁を喋りつづけ、博多にわかをする事が亡き父への最も良い供養となるのではないかと思う。



「兄の思い出」

妹 伊 藤 光 子

兄田中諭吉の思い出を書きなさいとの事ですが、私にとりましては、兄との関りのすべてが思い出の種です。私達兄妹は歳の開きが十才有りまして、其の間には一人も子供はいません。其の上父を早く亡くしましたので、兄は私の父親の役もしてくれたと思います。幼い私を兄はずい分とあちらこちらに連れて行つてくれました。花見とか菊人形とか子供向きの場所の他に寄席にもよく行きました。其中で特に子供心にも印象の深いのは圓遊の落語を聞いた事です。今でも思い出します。その頃の圓遊はもう小さなお爺さんでした。高座での目や手の動きのとても面白かった事、たしか題は「火事の富」だと思います。

夏目漱石の三四郎を読んでいますと律義に講義を受けて物足りない三四郎に興次郎が電車に乗れの寄席に行けの、小さん、圓遊等々芸術論をブツ所が有りますが、圓遊は漱石にも深い印象をあたえた事と思いました。この見物は私の一生の心の糧だと兄に感謝しております。其他、浅草オペラ、築地歌劇、築地小

劇場、など日本の芸能史を飾るものなど兄と一緒に見ました。

読書と芸術の好きな兄は自分自身の心の中に豊かな発想を持つ人です。それが兄の場合は、絵、字、ユウモア、となつて表現されました。特にユウモアは本人も意識せずに表れる事が有りました。母が思ひ出しては話した事でしたが、兄が小さい時に自分が眠つていながら、くすくす笑い出したので親が何が可笑しいかと聞くと『だれとか』さんが自転車に鼻の油をつけて乗つて行かつしやつたと言つたそうです。

もう一つの話は兄が夢の話をはじめました。友達のA君、B君、兄と三人で居ます、Aがエジプトに行つて來たと言います。現在と異つてそうそう外国に庶民が行けたものでは有りません。お土産に壺を買つて來たと言うのです。するとBがうそばつかり其の壺は高取焼じやなかとと言うのを、そこで兄がA君はエジプトに行つたとたい、エジプトもサワラの砂漠だし、高取焼も早良に有るけん、サワラに異いはなか。と仲裁したと話しますので、夢の中でしゃれば言いんしゃつたとたい、と一家中大笑した事が有りました。

真宗の門徒で有る我家では母が何事も親鸞お上人様々です。其頃青年の間でブームになつていた倉田百三の「出家と其の弟子」を兄が母に読んで聞かせました。母には場違いでピンと来ません横で聞いていた子供の私がしゅくしゅく泣き出した覚えが有ります。どんなストリーだつたかも思ひ出しませんが、ぜ

んらんと言うお弟子や遊女一とか遊女二とか居たようです。

兄は数え年の十七才で一家の戸主になりました。今ならばさしずめ母子家庭とでも言うでしょうが、幼い私は淋しいとも悲しいとも思わずのんびりほんやり育ちました。後年兄に美しいお嫁さんが見えて、家はいよいよ明るく楽しくなりました。其の明るさが今にもつづき、田中家のすばらしい六人の子供達の資質となっているのではないでしょうか。



鴛鴦道中姿



霧島で



「お礼のことば」

田 中 美沙緒

亡夫田中諭吉の十七回忌に当り、故人の思い出などを一筆お願いしましたところ、沢山の方々から原稿をお寄せいただき、お蔭様で立派な文集が出来上りました。

皆様方の心のこもった文章を読ませていただくと昔の記憶がよみがえり、思わず微笑んだり涙が出そうになつたりします。

故人が充実した悔いの無い生涯を送ることが出来ましたのは、ひとえに皆様方の暖かいお力添えがあつたためだと、家族一同心から感謝いたしております。

なお故人と親しくお付合い下さった人々の中には既に他界された方が何人もいらっしゃいますが、紙面を通してご冥福をお祈り申しあげます。

この文集は田中家の大切な記念として子孫に伝えて行きたいと思います。

どうも有難うございました。



題
表紙指導字
日本南画院理事
木原信

写真複製編集
キツノフオトスタジオ

株式会社マスプロ

福岡市博多区須崎町9-10

電話 781-8220

編集・制作

(株)マツオ印刷

電話 471-1786(代)

印 刷

福岡市南区野間二丁目三十一

田中 美沙緒

田中一家一同

発行日

昭和六十一年九月六日

